

ご注文はうさぎですか？  
シスターズライフ！！

しゅみタロス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「これは、妹に愛された兄の物語。」

元少年兵の天々座家の養子である主人公、天々座奈義ことナギはコーヒーバリスタの修業を終えて帰ってきた。そんな彼はラビットハウスで働きながら妹のリゼと幸せな日々を送る。

だが4年の間にブラコンと化したリゼのアプローチや他の妹たちがナギを狙ってきたり曲者ぞろいの常連客にナギは次第に振り回されていく。

ドタバタブラコンラブコメディがあなたを待っています。

ラビットハウスへようこそ。

※素人作品なので誤字脱字あるかもしれません。指摘お願いします。

# 目次

エクストラオーダー1	怪獣事変は突然	1
に		
プロローグ		4
オーダー1	コーヒーバリスタは桜の季節に妹と再会する。	8
オーダー2	ハーブティーの美味しい喫茶店でメイドさんにお兄ちゃんと呼ばれた。	17
オーダー3	緑茶を飲んでる人は大多数が羊羹好きだが俺はどら焼き派である。	26
オーダー4	パスタはミートソース派が	

大多数だが俺はあえてマイナーなペッパオイルを選ぶ。	34	
オーダー5	サンドイッチつとえばツナかエッグかでやたら迷う事ある？俺はその類だけ。	43
オーダー6	オムライスはケチャップも良いけどデミグラスもうまい。あ、作るのタカヒロおじさんです。	53
オーダー7	ストロベリーサンデーは危険な愛情、耐えられるかな？	61
オーダー8	甘味は全開だが同時にいやらしさも全開、今回ホントに大丈夫かなあ。	69

オーダー9 妹萌えの兄がいるならその

上に弟萌えの姉がいる。冗談じゃないよ

これ…… 75

オーダー10 妹の姉と話す事になった

が色々と間違った認識で会話が進んでい

く。どうしよう…… 82

オーダー11 夏が来たと思う時、それ

は夏服を着ている人を見ればそう感じ

る。 89

オーダー12 軍人と警察が出会う時、

空からアクシズが落ちてくる。エゴだよ

それは!! 95

オーダー13 夏休み回、お約束は無い

けど恋愛相談。妹成分皆無(おい)

101

オーダー14 プールだ!!水着だ!!妹だ

!!サービス、サービス!! 107

オーダー15 花火の空……伝える想

い…… 116

オーダー END 彼は心に輝きを宿し

ている。 124

スペシャルオーダー クリスマスのトキ

メキ 133

スイートオーダー バレンタイン・エク

スタシー 142

バースデーオーダー 最高のプレゼント

158	【3期放送記念】ナギ君のご挨拶。	
	い	
	ロマンスオーダー	
	ホワイトデーのお願い	149
		153

## エクストラオーダー1 怪獣事変は突然に

営業後のラビットハウス

リゼ「明日、5月31日はゴジラ キングオブモンスターズの公開日だ!!」

チノ「それは知ってるんですが何故武装する必要がありますか?」

リゼ「映画館で銃をゴジラに向けてこそ戦士だ!!」

ナギ「ただの迷惑行為だわ!!」

ナギはヘルメットを脱ぎ捨て、容赦の無いツツコミを入れる。

ココア「リゼちゃん、そろそろこの服着替えたいんだけど……」

リゼ「折角用意した衣装なんだが不満か?」

ナギ「嫌いではないな。こっちもゴジラシリーズに触れてきた身としてこの機龍隊

ジャケツトは夢のアイテムだ。よくこんなの見つけてきたな」

リゼ「ア○ゾンのセールで安く購入できたからな」

ナギ「リゼは筋金入りの機龍ファンだからな。随分昔に3式機龍のソフビでブンドドしてたし」

ココア「私はモスラかな。でも今着てる小美人衣装は嬉しいけどちょっと恥ずかしい

かな……」

ナギ「ココアはモスラか。チノはどの怪獣が好きなんだ？」

チノ「ゴジラ2004が好みですね。私が初めて見たゴジラなので。」

ナギ「ファイナルウォーズのあれだな。」

チノ「ナギ兄さんが好きな怪獣は……」

ナギ「メガロだ」

チノ「メガロってなんでしたっけ？」

ココア「カブトムシの怪獣だよね？」

ナギ「チノには分からないかなあ。」

リゼ「腕がドリルのかかなりマイナー怪獣だな。知らないのも無理はない。」

ナギ「これも世代だな」

ココア「そう言えばキングオブモンスターズに登場する怪獣って三大怪獣地球最大の決戦みたいだよな？ ラドンはハブられないか心配……」

ナギ「活躍の場面はちゃんとあるから安心だよ。ていうかよくそれ知ってたな」

ココア「ツ〇ヤで借りてチノちゃんと一緒に見てたから……」

チノ「夜更かしに付き合わされて私も何本か見ていました。」ズーン

ナギ「ドンマイ、チノ」

リゼ「おっと話し込んでいたらもうこんな時間か」

ナギ「じやあ俺たち帰るよ。また明日な」

チノ「お疲れさまでした。」

ココア「チノちゃん、シンゴジラ見ようよ。」

チノ「わかりました」

チノ（メガロ：：：今度見てみようかな：：：）

チノは意味深な笑顔を浮かべていた。

その頃天々座兄妹は：：：

リゼ「明日はキングオブモンスターズ公開と同時に大阪のユニバーサルスタジオジャ  
パンでゴジラ対エヴァンゲリオンが展開される。これも見逃せないな」

ナギ「前から言われていたが遂に実現するのか。大阪行きたいなあ」

リゼ「その時は、二人きりで」

ナギ「勿論だ」

# プロローグ

10年前

ロシア同盟国におけるロシアの第2都市、カウントゲートがロシア同盟国から独立発表した事でロシア同盟派と独立派軍による戦争が勃発し、カウントゲートは戦火に包まれた。結果は両軍とも痛み分けに終わり、都市部はほぼ壊滅状態。生存者すら奇跡ともいえる状態だった。そんな壊滅したカウントゲートの建物の物陰で隠れていた一人の少年がいた。

ガリツ「もう三日、同じものだな・・・」

敵の物資から奪った林檎、残り少ない水。少年は終戦後から一人だった。帰る場所も、家族も、自分の人生も失い、逆に死んだ方が良いとすら思うような何も無い人間となってしまう。だが数日後、彼に救いが訪れた。

カウントゲートに三台の軍事トラックと、一台の高級車がやって来た。

軍人1「一週間も遅れましたが、生存者なんているんでしょうか？」

軍人2「確かにこの様子じゃ本当にいたら奇跡ですよ……」

すると、高級車に乗っていた眼帯の男性が、啞えていた煙草を踏みつける。

眼帯の男「奇跡というのは待つものじゃない！必ず生存者はいる。その可能性を信じて俺たちはここへ来た。探せ！それだけが俺の命令だ。」

少年はその様子を見ると銃に弾を込め、軍人がいなくなつた所を狙つて眼帯の男に近づき、銃を突きつけた。

少年「動くな、何者だ、お前たち。」

眼帯の男は不意打ちに出てきた少年に対し、少し動揺しつつ少年に聞く。

眼帯の男「君、まさか生存者か!!」

少年「そうだ、生存者は俺一人だ。お前たちがここへ何をしに来たのか聞いています。」

眼帯の男は敵意の無い事を証明するために何をしに来たのか答えた。

眼帯の男「軍の難民支援でやってきた。生存者を探して保護するために。」

すると少年は高級車のウインドウに目をやると銃を下ろし、こう伝えた。

少年「ここには来るな。俺にも関わらなくていい。」

眼帯の男「なぜ、そう言う。」

少年「お前には家族がいる。大切な物がある以上俺はお前を殺せない。」

すると少年は銃を自身の頭に向け、引き金に指をかけるとこう伝えた。

少年「俺にはもう何も無い、ただ幸せな人間に会えて満足だ。悔いは無い。」

少年は涙を流しつつ。銃の引き金を引こうとする。

少年「じゃあな、幸せ者。」

だが……

ズガア!!!

眼帯の男は手で銃を払い、少年に向かって涙ながらに叫んだ。

眼帯の男「簡単に死を選ぶな!!」

そして眼帯の男は少年を抱き、答えた。

眼帯の男「なければ俺が作ってやる。もう苦しむ事なんてない。」

少年「!?……本当に、作ってくれるのか?」

眼帯の男「勿論だ、だから……俺の養子となれ。」

少年はそれを受け入れるとこう答えた。

少年「ありがとう……」

少年は高級車に乗り、カウンタゲートを離れる。すると車の運転手が少年にカップを渡す。

運転手「自信作のコーヒード。気に入ってくれとありがたい。」

少年「えつとあなたは……?」

運転手「香風タカヒロだ、君とは長い付き合いになると思う。よろしく。」

少年は豪邸に着くと、眼帯の男に何かを尋ねようとする。

少年「天々座のおじさん……」

すると眼帯の男は少し笑いつつこう答えた。

眼帯の男「君は俺の息子だ。そう呼ばずに父さんと呼びなさい。」

少年「ありがとう、父さん。」

天々座「入ろう、家族が君を待っている。」

そして少年は天々座家に入ると家族を紹介された。そして不思議そうに一人の女の子が少年を見つめていた。

天々座「俺の娘、天々座理世だ。今日から君は彼女の兄として優しくしてくれ。」

少年「はじめまして。」

不器用な返事にリゼは笑顔で返してくれた。

リゼ「よろしく、兄さん。」

天々座「そして今日から君は……」

天々座奈義。君はナギだ。ようこそ、天々座家へ。」

ここから今の自分が始まった。

オーダー 1 コーヒーバリスタは桜の季節に妹と再会する。

春の風、電車にはガラス越しの桜。新しい始まりに、悦に浸る一人の若者がいた。

??? 「ようやくここまで来た。実家での第2の生活が……」

天々座奈義19歳。元少年兵の彼は、コーヒーバリスタのエリート校を卒業し、4年ぶりに故郷の木組みの町へ帰って来たのだ。

アナウンス 「ご購入車ありがとうございます。まもなく終点です。」

そのアナウンスと共に荷物を運び席を立った。

そして町の入口へ。

駅員 「チケットと身分証明書をご提示ください。」

そして確認が終わり、階段を上った先は……

木組みの建物と桜の舞う、始まりの場所だった。そしてナギの目の前には……

タカヒロ 「やあ、ナギ君。迎えに来たよ。」

ナギ 「タカヒロおじさん、お久しぶりです。それと今日から仕事でお世話になりま

す。」

するとタカヒロは笑顔で返す。

タカヒロ「硬くならず、タメ口でもいいんだぞ。これでも家ぐるみの付き合いだつたじゃないか。」

ナギ「まあ、向こうで生活していれば、ここまで礼儀正しくなるのは不思議じゃないと思うんですが……」

タカヒロ「日常的に碎けても罰は当たらないぞ。さあ、固い話はやめて、ラビットハウスでゆっくりしようじゃないか。」

ナギ「そうですね、行きましようか。」

そしてナギはラビットハウスへと向かった。

現地到着後

ナギ「失礼します。」

ココア「わぁー！！すごいイケメン！」

リゼ「お帰り、兄貴!!」

チノ「ナギ兄さん、久しぶりです。」

ナギ「戻ったぞ、チノ、リゼ。」

ココア「あなたがリゼちゃんのお兄ちゃんですね、初めまして。」

ナギ「こちらこそ、俺の名前は天々座奈義。」

ココア「保登心愛ほとここあです。ココアと呼んでください。」

ナギ「よろしく、ココア。」

ココア「よろしくね！お兄ちゃん。」

ナギ（初対面でまさかお兄ちゃんと呼ばれるのか、悪くないけどこっちからしたら少しハズイな……）

要らないと思うが説明しておこう。

天々座理世ことリゼ。

ナギの義妹、軍人気質で男勝りの女の子。強気な性格で、何にでも隊という言葉をつけたがる。俺にとつては普通の女の子として生きてほしいんだが、家庭的な意味でそれは無理かもしれない……外見は悪くないのに。

香風智乃かふうちの、通称チノ

タカヒロの娘で、ナギとは小さいころに優しくしてもらったり遊び相手になっていた。ナギを兄さんと呼び慕っている他、リゼとも仲良し。現在は中学生でコーヒーバリスタという凄い子である。

タカヒロ「さあ、一息つこうか。丁度チーズケーキが焼けたからコーヒーと一緒にど

うぞ。」

出されたコーヒーと切り分けられたチーズケーキを楽しみつつ俺はケータイ取り出すと……

リゼ「兄貴、そのケータイはギャ○クシーs11じゃないか!!」

チノ「ギャ○クシーの新型ですね。インスタグラムとかやってるんですか。」

ナギ「勿論だ、学生時代のバイト先の風景や、料理の写真とか乗せてるんだ。」

ココア「お兄ちゃん料理できるの?」

ナギ「コーヒーバリスタに料理は必須科目じゃん。」

リゼ「あのなあ、兄貴はバリスタのエリート校に通ってたんだからそのぐらい出来て当たり前だぞ。」

ココア「そ、そっか……すっかり忘れてた……えへへ。」

その様子を見たナギは思ってしまった。

ナギ（か、可愛い……）

ナギの顔は少し赤みを帯びていた。それを見たりゼは心の中でこう思うのだった。

リゼ（兄貴のやつ、ココアにデレてるな。信じられない! 私にもデレてほしいのに……!!）

ココア「お兄ちゃんは喫茶店で好きなメニューとかあるのかな?」

ナギ「チョコレートワッフルとイチジクのタルト、ストロベリーサンデーブランデーソースがけかな？」

チノ「ナギ兄さんは甘党ですけど結構ビターも好きなんですよ、少し大人ですよね。」  
ナギ「成人までもう時間が無くなって来たけどな。リゼたちにはまだ分からないだろうな。」

ココア「お兄ちゃんは今何歳なの？」

ナギ「19歳、年齢的に大学生だな。でもタカヒロおじさんに頼まれてラビットハウスで働くことになった。」

ココア「どうしてラビットハウスを選んだの？」

ナギ「タカヒロおじさんの下で働けることが俺は嬉しかったんだ。断る理由は無かったよ。」

リゼ「いつもお世話になってたしな。中学時代から、ここでコーヒー飲んできたから。」  
チノ「私にとっても思い出のある喫茶店でしたからね。愛着があるのは良い事だと思います。」

ココア「お兄ちゃんにとってもつながりの深い場所なんだね。素敵だと思うよ。」

ナギ「これからよろしく頼むよ、ココア。」

ココア「任せて、お兄ちゃん。」

しかし、リゼはその様子を見て少し顔が引きつっていた。目線でナギに何かを伝えようとしているようだ。その様子にチノは少し違和感を感じていた。

チノ（リゼさんが心なしか不機嫌に見える……：決まってココアさんがナギ兄さんと親しくしている時……）

するとチノは空気を読んでフオローを入れた。

チノ「そろそろ時間も遅いですし、今日はお開きにしませんか。ナギ兄さんも疲れると思いますし。」

ナギ「もうそんな時間か。失礼、楽しかったよ。ココア。」

ココア「お兄ちゃんはいっつかからここで働くの？」

ナギ「明後日からだよ、その時にまた会おう。」

ココア「しばらく会えないね。でもめげない。」

ナギ「たかが一日で深刻になりすぎだよ。」

俺は無自覚にココアの頭を撫でた。すると……

ココア「なんか……落ち着く。」

ナギ「え？」

ココア「お兄ちゃんに撫でられると、何ていうか……変な気分になってきちゃった。」

ナギ「急に……何言ってるだよ、ココア。」

ココア「なんかドキドキして、もつと触ってほしい……おかしかな。」  
すると……

チノ「二人ともやめてください!!こんな不純異性交遊みたいな事を人前でしないでください!!」

ナギ「ごめん、チノ。そういうつもりじゃないだ。」

気まづくなった空気の中、天々座家の車に乗って俺とリゼはラビットハウスを後にした。

それを見送った後、制服を私服に着替えながら、ココアは呟いた。

ココア「お兄ちゃんにもつと甘えたいな。次はいつになるんだろう。」

一方天々座家に帰った二人は……

天々座「4年ぶりだな、ナギ。バリスタ修業のおかげで良い男になったじゃないか。」  
ウイスキーを片手に父親は喜んでいた。

ナギ「父さんも見ない間に味が出てきたと思う。カツコイイよ。」

天々座「気遣いは感謝する。仕事が明後日からなら、明日は懐かしい街でも歩いてくると良い。俺からの卒業祝いだ。」

すると父親はナギに1万円札を5枚も渡した。

ナギ「こんなに貰っていいの？」

父親「頑張った分好きだけ遊んで来い。お前にはその権利がある。」

ナギ「ありがとう、父さん。」

そしてナギは部屋を後にし、貰ったお金を財布に入れると自分の部屋へと向かった。4年ぶりの自室だ。トランクケースを運び扉を開けた。

だがそこには……

リゼ「用は済んだ？」

リゼが俺の部屋で、枕を抱いてベッドに座っていた。

ナギ「何でリゼが俺の部屋にいるんだ!？」

するとリゼは枕を置き……

ナギ「ぬわッ!!」

突然リゼは俺に抱き着いた。

リゼ「兄さんのバカ! 4年間も私を一人にした挙句、帰ってきて早々にココアと仲良くなつて……」

突然の事にナギは整理が追い付かなかった。ただ分かるのはリゼがナギと会いたがつてた事だけだった。

リゼ「ココアより私に甘えさせてよ。私を帰つてこなかった分だけ……愛してよ

……兄さん。」

ナギはリゼを抱きしめてこう答えた。

ナギ「一人にしてごめん、その分リゼの望みを叶えてやるよ。だから泣くな。」

「どうやら、リゼは俺不在の間に……」

ブラコンになっていたらしい。

オーダー2 ハーブティーの美味しい喫茶店でメイドさんにお兄ちゃんと呼ばれた。

ピロロロロロロ

「うつうつうん」

重い腕を伸ばし、スマホのアラームを止める。体を起こし、ベッドの目の前の窓を開けた。

春風と桜の花びらが舞う青空。その様子を見たナギは自然と心が舞い上がっていた。

ナギ「今日も一日、楽しくなりそうだ。」

シャワー室

ザアアアアアア

髪を洗い終わるとタオルを被り、鏡を見ると首筋に触れる。何かの焼印でつけられた「07」の番号。忌々しげにそれを睨み、ナギは呟いた。

ナギ「これ、早く消えてくれないかな……」

服を着ると長い廊下を渡り、リビングへと向かう。相変わらず使用人やスーツ姿のポディーガードがうろついているが、ここに来た時からこういう環境にいるから特に気にし

ていない。そのままリビングに入ると、英国の新聞を片手にコーヒーを嗜む義父が座っていた。

天々座「やあ、おはよう。ゆっくり眠れたか。」

英国の新聞を片手にコーヒーを嗜む天々座が座っていた。

ナギ「おはようございます。父さん。」

天々座「リゼがお前の事を待つてたぞ。キッチンにいるから少し顔出してきたらどうだ？」

ナギはその言葉を聞くとキッチンに目を向けた。

リゼ「兄さん、おはよう。朝ごはん出来るから、もう少し待つてて。」

その様子を見たナギはリゼに尋ねる。

リゼ「それって使用人の仕事じゃ……リゼがやる必要はないだろ。」

リゼはスクランブルエッグを焼きつつ、笑って返す。

リゼ「愛情はまず料理から。兄さんの笑顔も私の幸せだよ♪」

ナギはリゼの言葉が少し嬉しく感じた。妹に自分が大事にされている事を喜びつつ、コーヒーマーカーでエスプレッソを淹れると椅子に座り、スマホを取り出し、エプロン姿のリゼをカメラで撮る。写真を見てふと思った。

ナギ「コレクションに追加だな。」

タップで開かれたナギのケータイのアルバムは、妹キャラの写真で埋め尽くされていた。言わばナギは……

ナギ「これからリゼの可愛い写真を沢山撮ってリゼ萌えコレクションを……ハアハア」

重度のシスコンなのである。

※一応主人公です。

リゼ「兄さん、ご飯できたよ。」

ナギ「父さん、一緒に食べようか。」

天々座「すまないが、俺はこれから別の仕事がある。朝食は後で食べるよ。」

席を立ち、足早に去っていく天々座の姿に、ナギは首を傾げる。

ナギ「俺達何かしたのかな？」

リゼ「気にすること無いよ。気まづくなるところだから。」

その頃、司令官室で天々座は……

天々座「妻よ、リゼはどうやら兄を愛してしまっただけ。血は繋がってないとはいえ二人の愛を引き裂く権利が俺にあるのだろうか？教えてくれ。俺はどうすればいい？」

父親として、二人の間に出来た禁断の関係に頭を悩ませていた。

朝食を終え、セーラー服に着替えたリゼは、通学カバンを手にしつつナギに今日一日の予定を聞く。

リゼ「兄さんは、今日一日出かけるんだよね。どこ行くの？」

ナギ「食べ歩きかな。ここに帰ってから、久し振りに食べたい物が沢山あるからさ。」

リゼ「食べ過ぎないでよね。それと一つだけ忠告しておく。」

ナギ「忠告ってなんだよ？」

リゼ「他の女子に近づいたり遊んだりしたら、タダじゃおかないから。」

ナギ「俺が時々危ない奴に見えてるらしいけど、お前も相当だぞ……。」

お前が言うな、妹画像に欲情してたくせに。

リゼ「それじゃあ兄さん、今夜のごはん。期待しててね。」

ナギ「俺からも、今夜ゆっくりベッドの上で。」

リゼ「楽しみにしてる。行って来るね。」

そう言うとりゼは、嬉しそうな顔で学校へと向かって行った。

だが、家の物陰に隠れてナギを観察する二人の少女が居ることに、二人は気付いていない。

「あれが例のリゼ先輩のお兄ちゃんか。」

「リゼちゃんがあんなにデレデレになるのは珍しいね。」

「この後のバイトで、あのお兄ちゃんを攻略するよ。」

「私はその次の二番手で、私達も兄様の妹にしてもらうわよ。」

「ココアちゃんたち、良いおもちゃを紹介してくれたね。お楽しみだねえ。」

そしてナギは、謎のポーチと財布を手に街へと向かった。数多くの喫茶店の他、青果店やベーカリー、酒場など、食べ歩きには十分な店が沢山あった。そのまま街を散策していたナギは、巨大なラジカセを担いだ5人組のダンサーを見かけ、親しげに声をかけた。

ナギ「やあ、久しぶり。」

???「おお！ナギじゃないか!!帰って来たんだな。」

ナギ「ライブ決まってビデオも売れて波に乗ってるんだって？俺も今そんな感じ。」

紹介しよう。彼らは、全国的に活躍して人気になっているダンスグループ『ディーバッグ』。

リーダーのNISSAは、ナギの中学時代の同級生で、ダンスの勉強をする為にアメリカへ留学していた。

ニッサ「ナギはここで就職予定か？」

ナギ「タカヒロおじさんの下でお世話になる予定で実家暮らし。」

ニッサ「そっか、お前あの喫茶店気に入ってたもんな。幸せな事だよ。」

ナギ「暇があれば一杯付き合えよ、悪友。」

そう言つてナギは、ラビットハウスのコーヒー無料券を渡した。

ニッサ「言い方が引つ掛かるが、恩に着るぜ。妹マニア。」

ナギはニッサと別れると、次なる食を探して再び歩き始めた。だが、先程から背後に薄々と、妙な気配の接近を感じていた。

ナギ（なんだ、誰かにつけられてるような感覚が……）

ナギが後ろを振り向くと、そこには……

???「やつと気づいたんだね、お兄ちゃん。」

見知らぬメイドが立っていた。

ナギ「君は一体……？」

???「きりましやろ桐間紗路と言います。シャロって呼んで。リゼ先輩のお兄ちゃん。」

ナギは理解した、リゼの後輩だと。それならこちらも兄として挨拶するべきだと思います、身体を彼女の方へと向ける。

ナギ「天々座奈義だ、リゼが世話になつてる。」

シャロ「お世話になつてるのはこちらの方ですよ。それよりも少し話がしたいので、私のバイト先に行きませんか？」

ナギ「バイト先つて喫茶店？」

シャロ「そうです。ハーブティーのフルール・ド・ラパン、そこが私のバイト先です。」  
という訳で

店に入ればそこはメイドたちの楽園。ハーブの香りが染め上げる店内で、ナギはハーブティーを楽しんでいた。

シャロ「お兄ちゃん、どうかかな？」

ナギ「コーヒーにはないよなあ。こういう爽やかさは、悪くない。」

シャロ「ありがとうございます!!」

しかし、ナギの心中は穏やかではなかった。

ナギ（今更思い出したけど、この状況って後でリゼに死ぬほど怒られる可能性が……）

シャロ「お兄ちゃんどうしたの？」

ナギ「お兄ちゃんと呼ばれるとはずくてさ……」

すると何かを感じたのか、シャロは攻めの一手に入る。シャロは後ろ手にスマホをリゼへと繋ぐと、マイクの集音率を最大にする。

シャロ「お兄ちゃんって呼ばれるのは、恥ずかしいものなの？」

ナギ「俺の場合は、逆にそれが嬉しかったりする。ただ、恥ずかしいって言うのは妹好きの性というか……」

シャロ「じゃあ嬉しかったら、何してもいいって事だよな？」

その瞬間、シャロはスカートを下着が丸見えになるまでにたくし上げた。

シャロ「妹にこういう事されるのとか、好きなんですよ？」

ナギ「な、何考えてんだよ!!リアルでお縄行き案件だけ!!」

顔を真っ赤にし、慌てて顔を逸らすナギ。スカートから手を離しつつ、シャロはナギの本性を理解し、意味深な顔で微笑んだ。

シャロ「なるほどね、シスコンだけど性的な目では見てないんだ。案外純情だね。」

真っ赤な顔でゆっくりと頷き、ナギはそれを認めた。

そして別れ際に……

ナギ「今日はありがとう。でも過度な誘惑はやめてくれよ。どう反応したらいいかわからないから……。あと、俺がお縄にかかっちゃうから!!」

シャロ「ごめんね。でもでも、私はいつでもお兄ちゃんを待つてるからね。また来た時にはいっぱい甘えてもいい？」

ナギ「いいよ。ただしほどほどにしてくれよ?それじゃあ」

帰っていくナギの後ろ姿を見送りつつ、シャロは喫茶店に戻っていった。

帰宅後

ゴゴゴゴゴゴゴ

リゼ「兄さん……私の言った事、忘れてないよね？」

ナギ「誠に申し訳ございません。」

リゼの前で土下座をする羽目になったナギ。リゼの氷のように冷たい視線は、ある意味拷問だった。

そしてまた一人、妹が出来てしまった事にナギは頭を悩ませる事となった。

オーダー3 緑茶を飲んでる人は大多数が羊羹好きだが俺はどら焼き派である。

シャロの一件から一夜明けて……

リゼ「……」

ナギ（ど、どうしよう……これ絶対キレてるよな……不可抗力とは言えども後輩に手を出したんだから……）

無言のままトーストにマーマレードを塗る。見るからに怒りのオーラを滾らせている妹に、ナギは声をかけることすら出来なかった。

リゼ「兄さん……どれだけマーマレード塗るつもりなの？」

ここでナギは気づいた。トーストにマーマレードが山のように乗っていたことに。

ナギ「ごめん、考え事してたからつい……」

リゼはナギの様子を見てため息をつき、口を開く。

リゼ「言つとくけど、私はシャロの事なんか気にしてないから。ただ兄さんが他の女の子と一緒にいる事にイライラしてるだけだから。」

ナギ「てつきり、もっと怒ってるものと思ってたよ……。ほぼなし崩し的にだけど、

シヤロの兄になっちまったし」

リゼ「兄さんには怒らないよ。ただし、その分私を可愛がってよね♪」

ナギ（とりあえず、リゼは昨日の事を引きずってるわけじゃなさそうだ。良かった

……）

険悪な空気は一瞬で変わり、ナギは大量のマーマレードを塗ったトーストを齧った。

ナギ「のわっ!!甘っ!!」

朝食を食べ終え、リゼは学校へと向かう。

リゼ「兄さん、午後からラビットハウスで。」

ナギ「おう、待ってるぜ。」

リゼを見送り、ナギもシオルダーバッグを背負うと、ラビットハウスへと向かった。

ナギ「ラビットハウスでの初仕事……。精一杯頑張らないと」

俺はラビットハウスの目の前に来ると、意気揚々と扉を開けた。

ナギ「タカヒロおじさん、おはようございます!!」

タカヒロ「おはよう、元気な挨拶じゃないか。仕事の気合いも十分らしいね」

笑顔で挨拶を返しつつ、タカヒロはビニールに包まれた服を渡した。

タカヒロ「ココア君がナギ君の為に作ってくれた、ラビットハウスの制服だ」

ナギ「これ……ココアが作ってくれたんですか？」

タカヒロ「正確には、ココア君とりゼ君の共同制作だよ。昨日から徹夜で作ってくれたんだ」

その制服を見たナギは、とても嬉しそうな笑顔をしていた。

タカヒロ「もう少しでお店を開けるから、着替えてきなさい。更衣室は二階の左の扉だよ」

ナギは二階に向かい着替えると、制服姿の自分を見て眩いた。

ナギ「ふむ、悪くないな……」

ラビットハウスでの初仕事が始まった。早速入店してきた三人の客に、ナギは水を配る。メニューを伺うと、それを書いたメモをタカヒロに渡す。そしてメニュー運びも行う。この流れでローテーションが続く。まだ開店したばかりなので、注文はモーニングセットが多かった。だが、ここでナギはあることに気づく。

ナギ「確か、ラビットハウスは一定の人しか来なかったような……」

朝の時点でラビットハウスに来たお客さんは12人、みんな初めて来た人ばかりだった。常連客は殆ど居ない。つまり……

ナギ「仕事に限られるって事か……」

落ち込むナギにタカヒロが声をかける。

タカヒロ「そんなに落ち込む事無いじゃないか、客ならまだまだ来るからね。それま

での間、食器を洗うのを手伝ってくれないか？」

とりあえずやれることをちゃんとやっておこう。親しいお客さんが来るまでは少しの我慢である。

その後お客さんは少しづつやってきて接客も忙しくなった。やっぱり喫茶店の仕事はこれが一番だと、ナギはしみじみ呟く。やがて、時計の針は12時を指していた。

タカヒロ「午前中ご苦勞だったね。まかないのたまごサンドを作ったから、是非食べてほしい」

ナギはコーヒーと一緒にたまごサンドを一口齧る。それを飲み込むなり、ナギは何かを察した。

ナギ「普段食べるパンと全然違いますね？」

タカヒロ「良い舌を持っている。そのパンは今朝ココア君が作ったオリジナルなんだ。ココア君がいたらきつと喜んだだろうね」

ナギは少し顔を赤くしつつ、コーヒーを飲み干した。

仕事後半 リゼ達に加わり仕事のペースが速くなっていく。

リゼ「兄貴、そのパスタを運んでくれるか？」

ナギ「わかった、あ、注文票置いとくから頼む！」

チノ「お待たせしました。カフェモカです」

ココア「お兄ちゃん、クロワッサン焼けたから運ぶの手伝って！」

ナギ「すぐ行く!!」

そんなこんなで働き続けて一日の仕事がお開きになった。

タカヒロ「ナギ君、初仕事ご苦労だったね」

ナギ「ありがとうございます」

タカヒロ「この後、少しおやつを作るが一緒にどうかな？」

ナギ「お気持ちありがたいですけどこの後行きたい所があるので」

リゼ「兄貴、どこへ行くんだ？」

ナギ「何というか、良いお店を紹介してもらったからそこへ……」

不機嫌そうなりゼの顔を見て、ナギは罪悪感を感じスマホを取り出す。

『こつちから手を出すつもりは無いから、安心しろ』

ナギはリゼのスマホに、そうメッセージを送った。それを見たりゼは嬉しそうにして  
いるのを確認してナギは店を後にした。

後姿を見送るタカヒロは一言呟く。

ナギ「これも若気の至り、ナギ君もまだまだ青春しているねえ……」

ナギ「確かこの辺だよな、シャロの言ってた甘兔庵あまうさあんって店は……」

街を見渡すナギは、今いる場所からしばらく歩いてみた。すると、すぐに目当ての店は見つかった。

ナギ「あつた、この店だ。」

ナギは一呼吸すると店に入店する。

ナギ「失礼しまーす。」

すると、抹茶色の和服を着た少女がナギの前に現れた。

???「待ってました、天々座奈義さん。私の兄様」

ナギは唐突な兄様呼びに、こめかみに手を当てて答えた。

ナギ「普通にナギって呼んでくれてもいいんだぞ?」

???「いえ、リゼちゃんちゃんの兄様は私の兄様でもありますから」

ナギ（ココアは一体何を吹き込んだんだ……?）

気付かぬ内に妹が増えていく。ナギも対応に困っていた。

???「それと、私は宇治松千夜うじまつちやと言います。よろしくお願いします。」

その後、店の中に招かれたナギは、外を眺めながら緑茶を啜っていた。

ナギ「夕焼けと桜を眺めながら緑茶を嗜むのも、悪くないな」

千夜「お待たせしました。どら焼きの、天あまかけりゅうのひろめき翔龍閃せんです」

ナギ（……どこの飛天御劍流ひてんみづるぎりゅうですか!）

色々ツツコミたかったが、とりあえずどら焼きを一口食べてみる。

ナギ「う、美味い……」

千夜「この店自慢の小豆を使ってますので」

ナギ「これ、病みつきになりそうだな……」

すると千夜はナギの腕を掴み、身体を押し当てた。

千夜「私の方は？ こう見えて凄いなだよ、私」

腕に胸の感触が伝わるナギは、理性を立て直して答えた。

ナギ「ごめん、こういうのはちよつと控えてほしいな……後下手したら捕まりかねないから」

千夜「それなら、週に三回はここに来てほしい。近くで兄様を感じていたいから」

ナギ「わかった。千夜の兄となった以上、約束は守るよ」

そして帰宅後 ナギの自室にて

ナギ「なありげ、このままだままずいんじゃない……」

リゼは薄めのシャツ一枚で、ベッドの上のナギに抱かれている。

リゼ「何でもしてくれるって言ったのは兄さんじゃない。早く私を弄りなさいよ……」

ナギはもういなくてもいい、と言わんばかりにリゼのシャツの下に手を入れた。

リゼ「はあ……はあ凄く気持ち……」

ナギ「後でどう言い訳すればいいんだ……明らかに言い逃れられないぞ……」

リゼ「それでもいい、兄さんが私を求めてくれるなら……私、どうなっても……」

誤解を招きそうなので言っておくが、この後は胸を揉む以上の事はしなかった。

そして、ヒヤヒヤしたけど、父さんには特にバレる事も無く何とか貫き通す事が出来た……。

オーダー4 パスタはミートソース派が大多数だが俺はあえてマイナーなペツパ―オイルを選ぶ。

これはラビットハウスの昼休みの事……

ゴゴゴゴゴゴ

店内を重い空気が支配し、鋭い目線で見つめ合う天々座兄妹。その場にいたココアもチノも

手に汗を握っており、息遣いも荒くなっていた。

そして運命の時。

「ファイアツ」

バンツ

その掛け声と共にお互いは額にコントローラーを突きつけた。

「YOUWIN」

ナギ「俺の勝ちだな」

リゼ「うあああああまた負けたああああ!!」

チノ「ナギ兄さんこれで9連勝ですね」

ココア「おにいちゃんすっごーい!!」

チノ「流石は元軍人ですな。早撃ちのスキルがリゼさんを凌駕してます」

ナギ「こんな技術褒められても嬉しきを感じないなあ」

ココア「でもこのゲーム機入手困難なレアものなんだよね。私もチノちゃんと探しに行ったけど全然見つからなくて……」

ナギ「修業時代に喫茶店のバイトで給料貯金して買った大事な物なんだ。こうして皆で遊んだのはここに帰ってきて初めてだよ」

ココア「早く私も欲しいなあ。ニ〇テンドース〇ツチ」

この小説を読んでる人はもう知ってるかもしれないが一応このゲーム機について解説しよう。

ニ〇テンドース〇ツチとは

ニ〇テンドーより発売された次世代型ゲーム機であり、2017年の3月3日に発売され現在はあまりの人氣に品薄状態となっている。テレビにつないで遊べると同時に、最大の特徴として携帯機として切り替えて持ち運べるほか、パーツを分割してテーブルに置けば友達と即席で協力プレイが出来る。コントローラーもモーション機能やカメラ等のでんこ盛り状態である。

説明以上!!

ココア「次は何で遊ぶ？出来れば皆で出来そうなの？」

ナギ「そうだなあ皆で遊ぶそうなのか……」

カードケースを眺めてソフトを考えるナギ。彼は気付いていない。今、ラビットハウスに嵐が迫っていた事を……。

ナギ「皆、じゃあ次はコレで……」

カランカラン

「？」

昼休憩にも関わらずラビットハウスに入店してきた一人の少女とスーツ姿の高校生。いきなりすぎて言葉が出なかったが、とっさに今の状況を伝える。

ナギ「ああ、すみません。今昼休み中で営業の方は一時からなんです……」

???「気にすることは無い。世話になってるからな。ここには」

ナギ「え？」

タカヒロ「彼女はこの時間になるとよくお昼ご飯を食べに来るんだよ。」

ナギ「タカヒロおじさん、この人は……」

タカヒロ「この辺りでは有名な大金持ちの娘だよ。」

?????? 「三千院ナギと言う。ナギ様と呼ぶがいい」

?????? 「執事の綾崎ハヤテです、よろしくお願いします。」

その名前にナギは声が出せなかった。

三千院「名乗らんのか？」

ナギ「リゼの兄貴の天々座奈義と言います」

三千院「ほう、嘘をついてる目では無さそうだな。」

すると三千院は顔を近づけてナギに注文をした。

三千院「全身全霊のパスタでもてなしてもらおう。己の腕を私に示してみせよ。」

余りに強引すぎる三千院にハヤテは止めに入る。

ハヤテ「すみません、お嬢様が初対面で挑発的な事を……」

だがナギは悪い気はしていないどころか不敵な笑みを浮かべていた。

ナギ「良いでしょう、全身全霊のパスタ、ご馳走しますよ。」

リゼ「ちよつと兄貴、こんな話に乗る必要なんて……」

ナギ「面白いからいいだろ、タカヒロおじさん。厨房借りていいですよね。」

タカヒロ「好きなように使つて構わない。やりたいようにやればいいさ。」

ナギは厨房に行く前に、ハヤテにこう伝えた。

ナギ「ハヤテさん、あなたとは気が合いそうだ。今度会いに行つても良いですか？」

それを聞くと、ハヤテは笑顔で答えた。

ハヤテ「はい、是非遊びに来てください!!」

そしてナギは厨房に向かうと、パスタと食材を取り出して早速調理に取り掛かった。  
ナギ「パスタのテーマは、エビと炒め玉ねぎだ」

そしてナギはエビの殻をむき、塩揉みする。次に玉ねぎを取り出して千切りにすると、それをフライパンにバターを落として炒めていく。玉ねぎがあめ色になる頃、エビを投入してしばらく炒めるとナギは火を止めた。

ナギ「パスタには世界が存在している事を教えてやる。こいつでだ」

ナギが取り出したのは蝶の形をしたパスタ、ファルファレだった。ナギはお湯を沸かして塩を振り、ファルファレを茹でると水を切つて炒めたエビと玉ねぎを上に乗せる。仕上げにナギは、ある調味料の瓶を取り出して蓋を開ける。

ナギ「ペツパーオイルの力を見せてやる」

スプーンにオイルを乗せてパスタにかけると、それを具材と和え、最後にハーブを添える。

ナギ「完成だ」

ナギ「お待たせしました。エビと玉ねぎのスパイスファルファレです。」

三千院「ファルファレか。センスを感じるパスタだな」

ハヤテ「それではナギさん頂いても良いですか。」

ナギ「是非」

静かに手を合わせ、二人はファルファレを口にしました。

静まり返る店内、三千院の口から出た言葉は……

三千院「タカヒロほどではないが、賞賛に値する。ナギよ、常に自分の腕を誇りに思え」

ナギ「ありがとうございます!!」

タカヒロ「ナギ君の腕には、まだまだ期待できそうだね」

三千院「また明日、邪魔させてもらうぞ」

ナギ「またのご来店をお待ちしております」

……と思いきや、帰り際にココア達のいた机を見て三千院は足を止めた。

ハヤテ「お嬢様、どうかされましたか？」

三千院「もう少しココに残る事にした」

ハヤテ「目から欲望が滲み出てますけど!!」

三千院「ナギよ、あのス〇ツチで遊んで行っても構わんな!!」

ナギ「勿論いいですよ、マ〇オカート8DXで対戦しましょう」

タカヒロ「皆で遊ぶならその画面は小さいだろう。二階に大きいテレビがあるから、好きに使ってくれて構わないよ」

ナギ「ありがとうございます。皆、二階に行くぞ!!」

「階段を上がっていく面々を見つつタカヒロは呟いた。

タカヒロ「楽しければすべてよし。ナギ君はその思想を体現しているね」

帰宅後

カチカチ

ナギ「マニニューバが強すぎるな。ローラーは間違いだったか」

リゼ「何で連射タイプの武器を選ばないの？」

ナギ「うわっ!! 誰かと思えばリゼか。いきなり部屋に入ってどうしたんだ？」

リゼ「兄さん、今話せそうないかな？」

ナギ「これ終わったら聞いてやるよ」

そして戦闘結果は……

ナギ「ギリギリ勝利した、マジでダメかと思ったよ」

リゼ「私だったら3キルなんて余裕なのに」

ナギ「ス〇ラトウーンは塗らないと意味の無いゲームだよ。キル前提なんて一言も

言つて無いし、俺はそもそもエンジンヨイ勢なんだ」

ナギは机の横に置いてあった炭酸ドリンクに手を伸ばして缶を開けた。

ナギ「で、話つて何？」

リゼ「明後日兄さんは仕事休みだよね？」

ナギ「休みだけ……」

するとリゼは顔を赤くしながら、何秒かの沈黙の後に要件を伝えた。

リゼ「映画を見に、デートに行かない？」

ナギ「デ、デート!!」

いきなりすぎて大声出してしまった。

リゼ「大声出さないで、恥ずかしいから。」

ナギ「ごめんごめん、て言うかそもそも映画って何を見に……」

リゼ「これなんだけ……」

リゼが手に持っていたのは2枚のペアチケットだった。その映画は……

ナギ「名探偵○カチユウか」

5秒ほど思案して、ナギはニヤリと笑いリゼの頭を撫でた。

ナギ「わかった、一緒に行こうか」

リゼはその言葉を聞いて笑顔でナギに抱き着いた。

リゼ「週末、楽しみにしてるよ。兄さん」

ナギはリゼとデートに行く事になったが、後にこのデートがある人物との邂逅に繋が

る事を二人は知らなかった。

その頃、木組みの町の隣にある地区では……

「全く、暴力受ける身にもなってくれよ。」

「別に私だつてやりたくてやつてる訳じゃ無いんだから」

「それで、次のニセデートは映画だつて？」

「ニセデートで言い方引つ掛かるからやめてくれる？」

「とは言つても本当に付き合つてる訳じゃねえし」

二人の男女が言い争っていた。  
（結局変わり無しか、いつ気付いてくれるんだろう？このバカもやしは……）ある

オーダー5 サンドイッチつと言えばツナかエッグかでやたら迷う事ある?俺はその類だけど。

ナギ「これでいいかな……」

ラビットハウスで仕事を始めて最初の週末の事、ナギはリゼとデートに行く事になった。

ナギ「まさか初デートが妹って何か変な感じだな。それに……」

5秒の沈黙の後、出てきた言葉は……

ナギ「ものすごい犯罪臭を感じる!!」

(※血は繋がってないので毒牙にかけてもオールOKです。)

ナギ「アウトだよ!!テロップもつと自重しろよ!!」

メタ発言と共にテロップを殴りつける。

ナギ「とにかく、そろそろ家を出よう」

ナギは財布とスマホをウエストポーチに入れ、部屋を後にした。外を出ると、庭に植えてある林檎の木の下でリゼが待っていた。

リゼ「兄さん待ってたよ」

ナギ「ああ、待たせてごめん」

ぎこちないナギにリゼはクスリと笑った。

ナギ「何がおかしんだよ」

リゼ「兄さんってニーソックスに目が行くから案外ムツツリだよねって思っ」

ナギ「年上をからかうもんじゃないぞ」

リゼ「それにスカートも兄さんがドキドキするような短さにしてみた。興奮するでしよ？」

ナギは悟った。

ナギ「リゼの奴、誘ってやがるな。それにラビットハウスでの口調や性格の差がありすぎる」

このままホテルで一夜を……

ナギ「ナレーション少し黙れ」

はい。

ナギ「とりあえず出発しようか」

ナギは手を出すとリゼは嬉しそうに手を繋いだ。

リゼ「今日だけは私を女の子として見てよね♪」

ナギ「何言ってるんだ、俺はリゼを女の子として見てるよ。今も」

リゼ「良かった」

ナギはその様子に微笑むとリゼと二人で家を後にした。

隣町まで電車に揺れる。ナギの側からリゼは離れる事も無く、ただリゼの甘い笑顔に

ナギの表情も綻んでいた。

一方で、電車に乗る一般客から見れば俺とリゼはリア充だ。案の定、周囲からは心なしか重苦しい空気を心感じていた。

電車が止まると改札口を出る。駅を抜けるとそこは、多種多様な店舗が立ち並び、沢山の人で賑わう現代的な街並みだった。

ナギは携帯のマップを頼りに、リゼとしっかり手を握って映画館へと向かうのだった。

その頃同じ場所では……

??? 「恋愛雑誌の懸賞でまさか当たるとはな。何か呪われてるんだろうか……」

彼の名前は一条楽。高校2年生でヤクザの息子である。

??? 「そういう私の皮肉みたいに言うのやめてくれる? 私が○カチュウ好きなの前々から知ってたでしょ」

彼女は桐崎千棘。楽の恋人?でありギャングの娘。

楽「まあ別にお前の事は別に悪く思っただけ、何かこの恋人関係に終止符打ちた

いなくて思つてき……」

バゴツ

楽「グフウ!!」

千棘「信じらんない!!この関係に終止符なんて、どんだけ私の事嫌いなものよ!!」

楽「あのなあ俺たちはそもそも正當な恋人じゃなくて……」

千棘「うっ、ううっ」

突如として千棘が涙を流し始める。これはまずいと感じた楽は、千棘の顔を優しく撫でた。

楽「ごめん、言い過ぎた。この関係の事に文句はもう言わないからもう泣くな」

千棘を何とか泣き止ませ、楽は彼女と共に映画館へと向かった。

受付でチケットを確認してもらい、リゼとナギの二人は待合室でドリンクを購入しつ

つ座席へと座る。その座席の横には楽と千棘も座っていた。

ナギと楽は何の因果か口をそろえてこう呟いた。

ナギ・楽「女って案外疲れるな」

ナギ・楽「え？」

ナギと楽は何の因果か口をそろえてそう呟いた。あまりのタイミングのよさに、ナギと楽はお互い顔を合わせる。

楽「苦勞してるのは俺だけじゃなさそうだな」

ナギ「ご愁傷さまです」

5分後

楽「喫茶店で働いてるんですか?しかも19って事は先輩ですね」

ナギ「高校生で家がヤクザとは気が抜けない環境ですね。俺だつたら胃痛起こして  
よ」

千棘「軍人の家柄なのね。それに私よりも身長低くて可愛いと思うわ」

リゼ「ギャングの娘と言う千棘さんも共感できるな。物を壊す癖も私と同じだ」

ナギ「楽、これから隣の席とか迷惑じゃないかな」

楽「問題ないですよ先輩」

千棘「私はリゼちゃんと見ていいかな?」

リゼ「それなら是非一緒に!」

5分ぐらい互いの話でもりあがり、気が付けば両者はすっかり意気投合していた。

上映開始

ナギ(○カチュウモフモフだ、こういうぬいぐるみ後で物販で探してみるか)

楽(ポケモン映画とは聞いていたが序盤で事故シーン見る事になるとは……)

物語中盤

千棘（巨大なド○イトス。まるで動く島みたい）

リゼ（ゲッコ○ガの水手裏剣、カッコいいなあ……）

### 物語終盤

楽（○カチユウがミ○ウツー相手に善戦してる）

ナギ（人をポケモンにするとか恐ろしい発想だな……）

千棘（ミ○ウツーは悪い人じゃ無かつたんだね）

リゼ（よし！洗脳を解いた。形勢逆転だ）

上映終了後 物販コーナーにて

ナギ「あつた！○カチユウのぬいぐるみ!!」

楽「ナギ先輩ってぬいぐるみ好きなんですか？」

リゼ「兄さんはニ○テンドーオタクだからさ。こういうアイテムに目が無いんだ」

千棘「リゼちゃんのお兄さんて可愛い所あるね」

ナギ「ニ○テンドーほど楽しいコンテンツはありませんから」

シヨツピング終了後

ナギ「ちよつとハイになって買いきすぎたかな？」

楽「俺もおすすりめ品とか限定品につられてつい……」

リゼ「ホントいいの？私の荷物まで持ってくれて？」

ナギ「こういう時は男に頼れよ。何の苦もないから」

千棘「ナギさんしつかりお兄ちゃんしてるね。カツコイイ」

リゼ「私にとつての一番の兄さんだから」

千棘「そこにいる力の無いもやしとは全然違うね」

楽「そりやどうも、千棘だつて力あるなら自分で持つていけるだろ！」

千棘「でも、私は楽のそういう所、実は好きだつたりするんだよね」

楽「な、何言つてんだよ。俺は別に……」

かなりドギマギしている楽を見て、ナギは何だか楽しそうにしていた。

ナギ「楽つて案外分かりやすい反応するんだな」

楽「弄らないで放つておいてくれ」

千棘「それよりもお腹すいちゃったし、4人でサンドイッチ食べに行こうよ」

ナギ「それもそうだな」

映画館横の喫茶店

ナギ「感謝するよ楽くん。行きつけの店を紹介してくれて」

楽「ここのランチは安くて美味しいからよく来てるんです」

千棘「クリームチーズツナとトマトエッグの二種類から選べるみたい」

リゼ「悩みどころだなあ」

楽「ナギ先輩はどれにしますか？」

ナギ「実はこういうのって結構悩んじゃうタイプでさ。よく長考するんだよね。」

楽「メニューで長考って、ナギ先輩すごい慎重なんですね……」

ナギ「楽が選んだものを俺は頼むことにするよ」

楽「じゃあトマトエッグ2つ」

千棘・リゼ「クリームチーズツナお願いします」

やがて注文が届き、各々はサンドイッチに舌づつみを打つ。ナギ「これうまいな。

コーヒーが最高に合うよ」

楽「俺、ここのトマトエッグサンドイッチはもう7回近く食べてるけど、全然飽きな

いんだ」

千棘「クリームチーズツナ最高!!」

リゼ「千棘さんよく食べますね!」

楽「食事代だけで2000円消えた……」

ナギ「楽も苦労してるね」

楽しそうな女子二人に反して、男子二人には重い空気が降りかかっていた。

食事後

ナギ「それじゃあ俺達、そろそろ帰らないと。一日ありがとう」

楽「こちらこそ、一緒にいて楽しかったです」

ナギはスマホを取り出し、画面を操作する。

ピローン

すると楽のラインには、ナギの名前が登録されていた。

ナギ「一緒に何かあれば語ろう」

楽「勿論です。先輩」

リゼ「兄さん！そろそろ行くよ」

ナギ「それじゃあ彼女と仲良くな」

楽「はい」

ナギ「それと好きな人、早く見つけろよ」

楽「え？」

その言葉に楽は固まってしまった。

楽「まさか先輩、俺と千棘の関係の事……」

ナギ「何となく気づいてただけど、言ったらまずかった？」

楽「まあ秘密にしてくれるなら」

ナギ「わかった」

ナギは楽の今後に期待しつつ、リゼと共に電車で帰路についた。

だがナギもまた、新たな出会いを経験することになる。

??? 「……」

そこにはパソコンに向かい、作曲に熱中する一人の男がいた。

??? 「次のライブは1週間後、この曲でランキングは俺の独占だ！待ってるよ連続ランキングトップ！フッフ、ハーツハツハツハ!!」

オーダー6 オムライスはケチャップも良いけどデミグラスもうまい。あ、作るのタカヒロおじさんです。

新聞を抱えた客「いやー、ここの朝食は素晴らしいよ」

ナギ「ありがとうございます!!最近ここ良く来ますね」

新聞を抱えた客「あ、名乗り忘れていたね。僕はこういう者なんだけど」

ポケットから名刺を取り出しナギに渡す。

ナギ「ええっ!?ちよ、ちよつと待つてください!!米四津玄師郎よねしげんしろうさんのマナージャーな

んですか!？」

新聞を抱えた客「堀谷謙一ほりやけんいちと言う者だ。玄師郎君のライブがこの町のホールで開催さ

れるから、この町で世話になっている」

今、若者の間で人気の歌手が近日この町にやって来ると聞いて、ナギは目を輝かせて

いた。

ナギ「ライブはいつやるんですか?」

謙一「明後日の午前9時からだ。それと……」

謙一は財布から4枚のチケットを取り出した。

謙一「コーヒーと朝食代の代わりに、僕の独断で君と友達をライブに招待しよう。君は良い目をしてるからね」

ライブのチケットを提示され、完全に目のくらんだナギはそのまま勢いよく頭を下げた。

ナギ「お支払いありがとうございます。楽しませていただきます」

代金を対価にチケットを入手した。そして……

リゼ「兄貴、何美味しい悪魔の囁きに乘せられてるんだ？」

ナギ「すんません、マジで理性とか吹っ飛んでました」

ココア「でもでも、折角招待してくれるって言ったのなら行くべきだよ」

チノ「若者の間で人気を博している歌手のライブなんて、中々行けませんからね。代

金の元は取れた様に思えますよ」

ナギ「皆で明後日行こうか」

リゼ「でもラビットハウスの仕事どうするんだ？」

三人「ああ……」

流石に仕事は抜けられない、と項垂れるラビットハウスメンバー。そこへ、陰からその様子にニヤリとしながら見守っていたタカヒロが、四人に声をかけた。

タカヒロ「君たち、まだ若いのに仕事の事抱えすぎじゃないのかい？」

ナギ「ただでさえシフトが切羽詰まってるのにいきなり遊びを理由に休むのは……」

タカヒロ「若者がそんな事言つてたら、青春なんてないまま二十歳迎える事になるぞ」  
ナギ「じゃあどうすれば……」

タカヒロ「俺に頼れ。一日ぐらい苦じやないし、ラビットハウスは任せてライブ楽しんでくると良い」

ナギ「良いんですか!!」

タカヒロ「任せなさい!!」

四人「……」

少し間が開いて、その直後。

四人「イヤツツツツツタアアアアアアアア!!」

ライブに行く事が決定した事で、四人は喜びとエネルギーに満ち溢れていた。

翌日

四人（ライブがいよいよ明日）ソワソワ

集まった四人はやたらソワソワしており、スマホでセットリストを眺めつつ、朝の開店時間まで暇をつぶしていた。どうやら四人は、集合時間よりよ早くラビットハウスに来てしまったらしい。

そして開店時間。

ナギ「よし、仕事開始だ」

そして今朝も一番の客は、何やら含みのある笑顔を浮かべつつ現れた。

謙一「やあ、昨日も世話になったね」

ナギ「いらつしやいませ。後こちらも自己紹介がまだでした。天々座奈義って言います」

リゼ「妹のリゼだ」

ココア「ココアです。ライブの招待ありがとうございます」

チノ「チノです。このマスターの娘です」

「それじゃあ、四人に是非会ってほしい人がいる。君たちへの僕なりのサプライズだ」  
堀谷がドアを開けると、フードを被った若者がラビットハウスへと入店する。

ナギ「あなたは……」

フードを外したその男は……

フードの若者「初めまして、米四津玄師郎です。こうして一般の人と顔を合わせるのは初めてですが……」

ナギ「ほ、ほほほ、本物ですか!!」

謙一「今日は彼にも、このフレンチを頂きたい。彼、すぐく大食いだから覚悟して

くれよ?」

玄師郎「ここの味は謙一マネージャーから聞いてますよ。とても美味しい、と毎日のように自慢されてます」

ナギたちの足は緊張で震えていた。当然だ。目の前に、今をときめく有名人がいるのだから。

ナギ「しゃ……写真を、お願いできますか?」

玄師郎「構わないけど、ネットとかに乗せるのは勘弁してくださいね。マスコミに嗅ぎつけられたら僕だけじゃなくて……恐らく、この喫茶店も危ういですから」

ナギ「じゃあこの事は胸の内に仕舞っておくので、一枚お願いします!」

玄師郎「わかりました。謙一マネージャー、彼のスマホで撮影お願いしますか?」  
ラビットハウスのメンバーが、玄師郎さん囲む構図で一枚。ナギはそれをスマホのアルバムに保存し、LINEを通じてリゼらに共有する。四人は揃って、写真を見ながらニヤけていた。

二人は座席に座ると、メニュー表を見て朝食をオーダーする。

ココア「ご注文伺っても良いですか?」

謙一「クロワッサンセットとコーヒーを。玄師郎君も同じで良いかな?」

すると玄師郎は、少し考えてあるメニューを頼んだ。

玄師郎「この後僕はリハーサルがあるので、ガッツリしたものが食べたいですね。オムライスをお願いします」

ココア「ソースはどうなさいますか？」

玄師郎「じゃあ、デミグラスソースで」

厨房

タカヒロ「オムライスか……腕の見せ所だね」

タカヒロは調理を始める。玉ねぎを刻み、グリーンピースを茹で、鶏肉を切る。ナギの腕では到底追いつけないスピードで、あっという間にチキンライスを完成させると、続いてオムレツの調理に取り掛かった。絶妙な火加減とかき混ぜ方で卵をふわとろに仕立て、完成したオムレツをチキンライスに乗せ、最後に特製のデミグラスソースをかける。

ナギ「お待たせしました。デミグラスオムライスです」

玄師郎「わあ！これは美味しそうだ！いただきます！」玄師郎はオムライスを前にして、嬉しそうな顔でスプーンを手に取ると、慎重にオムレツを割っていく。

ホカホカのチキンライスに広がっていく、ふわっふわでとろりとした卵の衣。デミグラスとふわトロの卵を絡め、チキンライスと共にスプーンの上に乗せて口の中へと運んだ。

玄師郎「おいしい……謙一さんが通い詰めになる訳だよ！」

謙一「僕の言うとおりでしょ。ここのクロワツサンとオムライスは素晴らしいんだつて」

ナギ「お褒めに預かり、光栄です」

そして食事を終えた二人は、仕事の関係でホテルに帰る事になった。

玄師郎「今日は素晴らしい料理をありがとうございました！」

謙一「明日のライブ、期待していてくれ。ここの食事を力に頑張るからね」

ナギ「期待してます!!ありがとうございます!!」

この後、四人のモチベーションが滅茶苦茶上がったのは言うまでもない。

そして当日

ナギ「地元のデカイホールまでライブ見に来るなんて初めてだな……」

座席に座り、サイリウムを片手にライブ開始を待つ4人。

リゼ「これ持ってたら、なんだかモ〇ルスーツを斬り倒したく……」

チノ「サイリウムはガ〇ダムのビームサーベルじゃありません」

ココア「そろそろ始まるよ!!」

やがて、カウントと共にステージに玄師郎さんが現れた。

その後、玄師郎さんは3時間もの間、自らの人気曲を歌い続ける。力強い歌声と幻想

的な音色、ロマンチックな歌詞のさざ波に、ナギたちは長い夢を見ているように感じた。約18曲に上る楽曲と、プロジェクションマッピングによる大規模なライブは、見る者にとっては異次元の中そのものだった。

ライブが終わる頃、余りの凄まじさに四人はしばらく意識が飛んでいた。会場を後にした四人は、近くの自販機でドリンクを買って喉を潤す。長いのにあつという間に過ぎ去る不思議な感覚から解放され、四人は揃って帰路へと着くのだった。

リゼ「今日一日楽しかったけど、なんか終わってほしくない一日になっちゃたね」

ナギ「俺も同じだよ。何か家に帰るのも嫌になってる」

名残惜しげにホールの方向を振り返るリゼに、ナギは提案する。

ナギ「これからさ、ラビットハウスで夜更かしでもしていかないか？この時間バータイムだし、ラビットハウスなら父さんも許してくれるだろ」

リゼ「じゃあ、今夜は二人で夜更かししよっか☆」

ラビットハウスに向かった二人は、バータイムの看板の掛かった入口を開けると静かに入店する。

タカヒロ「お？誰かと思えば、兄妹揃ってここに来るとはね」

ナギ「タカヒロおじさん、今夜ちよつとバータイムで世話になつていいですか？」

タカヒロ「わかった、ゆっくりしていきなさい」

オーダー7 ストロベリーサンデーは危険な愛情、耐えられるかな？

休日前の金曜日 午後

カランカラン

常連のおじさん「ごちそうさん、また来るよー」

ナギ「ありがとうございました」

古いレジスターには少し熱い札束が入っていた。

ナギ「あのおじさん、毎回来るたびに支払いにチップ置いてく……。競馬好きと聞  
くが、これだけ渡せると言う事は相当の強運と見た」

リゼ「まあ、貰えるなら貰った方が良いんじゃないか。その分こっちはサービスして  
るし」

シャロ「お兄ちゃんは深く考えすぎだよ」

千夜「終わりよければ全てよしと言いますから」

ナギ「と言うかあんたら、今日一日ラビットハウスで過ごすつもりか？」

今日、シャロと千夜はバイトが無いので、ラビットハウスに入り浸っていた。

ココア「いいなあ、二人はお休みで」

チノ「とは言っても明日は週末なので、今日頑張れば後は自由ですよ」

シャロ「それに今日は、お兄ちゃんに聞きたい事もあるので」

ナギ「なんだよ、急に改まって」

コーヒーマーカーからコーヒを淹れつつ、氷を落とす。

シャロ「妹モノのビデオ見たんですが、お兄ちゃんの場合、ゴ〇とナ〇どちらが気持ちいいのかなって？」

千夜「兄様でしたら私はナ〇でも構いませんけど」

ナギ「女子高生に手エ出すか!!」

リゼ「兄貴」ギロツ!!

ナギ「ヒツ!!」

明らかに不機嫌なりゼに、俺はとりあえず言葉を掛ける。

ナギ「言つとくけどそう言うのは好きな人と以外、俺はやらないから。寧ろ妹を毒牙にかけて、兄として責任問題に繋がりに兼ねないからな。それに……」

するとナギの腰にリゼが抱き着きシャロと千夜に言い返した。

リゼ「兄貴に手出ししたらタダじゃおかないから!!」

こればかりはリゼも耐え難かったのだろうと手の力でナギは感じていた。シャロ

は何かを悟ったようなにやけ顔でリゼに言葉を返した。

シャロ「わかったよ。行き過ぎた事はしないけど、お兄ちゃんとはそれなりの関係つて事にするね」

ナギ「どうしたんだよ、急に雰囲気違くないか？」

千夜「妹としての心遣いです」

そしてリゼは小声でナギに呟く。

リゼ「営業終わったら責任取ってよね、恥ずかしいんだから。こういうの……」

ナギ「分かったよ」

若干リゼの口元がにやけていた。

そして厨房の奥から案の定この声が聞こえてきた。

タカヒロ「なんか感心しない会話が聞こえたが、丸く収まったみたいだね」

ナギ「タカヒロおじさん、これはその……」

タカヒロ「深くは聞かないよ、これも若気の至り。隠し事の一つや二つある物さ」

ナギは胸を撫で下ろし、すっかり氷の溶け切ったアイスコーヒーを飲み干した。

タカヒロ「それじゃあ、今日の営業はこれでおしまいだよ。ブラウニーを焼いたから

ティータイムといこうじゃないか」

ナギ「ごちそうになります」

ココア「やっと終わったー!!お休みだー!!」

チノ「さつきまでのテンションは一体……」

ナギ「分かるなあ、あの感じ」

(修業時代の週末や連休の時の俺も、あんな感じだったし……)

この後ティータイムを存分に満喫した後、夕食の買い出しをして帰路へとついた。

夕食後、俺は自分の部屋でリゼの言う通り責任(と言う名のイチヤイチャ)に付き合っていた。

リゼ「ああ、イイツもつと、吸って……」ビクンツビクンツ

ナギ「ジュルツ、ズルルツ、ピチャア……はあ、はあ……」

首筋を過剰なまでに吸い、甘噛みをした。

ナギ「それなりの線引きはしてるけど、明らかにアウトだな……」

リゼ「兄さんなら私は受け入れてあげるよ?いつそ中に出しても良いけど」

ナギ「それはやらないって言っただろ」

リゼ「でもこうして兄さんと身体を重ねる度に、兄さんの温かさや優しさを感じられる。私はそれだけが幸せで、何か変な気分になっちゃうんだ……」

ナギはそれを聞き終わるとリゼは静かになった。別にアレな事はしてないがベッドの横には、黒の下着姿のリゼが眠っていた。

ナギ「現場的に事後つぼいが特に何もしていない……。しかし、一線は超えなかったものの、問題だらけの様な気も……」

リゼには悪いが、今夜は一人で外を出ることにした。眠れないのも理由ではあるが。

ナギ「お休み、リゼ」

ナギは上着を着て、外を出た。すると……

天々座「こんな時間に夜遊びか、ナギ」

ナギ「父さん……まあ夜遊びではあるけど」

天々座「好きなようにしろ、俺は何も言わん」

ナギ「ありがとう」

天々座「……若気の至り、か。タカヒロも甘いもんだな」

タカヒロはそう呟き、ウイスキーをのグラスを見つめながら、つまみのチーズを口にした。

夜の街を歩き、ナギは明かりの灯るラビットハウスで足を止めた。扉にはバータイムの看板が立っていた。

カランカラン

扉を開けるとグラスを拭くタカヒロがカウンター席に立っていた。

タカヒロ「おや？誰かと思えばナギ君か。珍しい事もあるもんだね」

ナギ「すみません、タカヒロおじさん。こんな時間に」

カウンター席に座るナギは隣に置いてあるセルフの氷水をグラスに注ぐ。

タカヒロ「眠れないのかい？」

ナギ「それも理由ですが、眠れるような状況じゃなくて……」

口籠るナギにタカヒロはズバリ当てた。

タカヒロ「さては、リゼ君とお楽しみだったかな？」

ナギ「思いつきりそうですけど、言葉としては聞きたくなかったなあ……」

タカヒロは嬉しそうにナギを諭す。

タカヒロ「世の中の人は、刺激が無いとつまらなくなるものなんだ。ナギ君みたいな

子ほど、スリルや爽快感を欲しがるものだと思うよ」

ナギ「やつぱり、タカヒロおじさんには頭が上がらないな。そこまで俺は大人になり

きれないよ」

タカヒロ「それよりも、ここに来たのなら注文の一つや二つ頼んでも構わないよ。代

金は取らないから、なんなりと」

ナギ「ストロベリーシロップソーダを」

タカヒロ「かしこまりました」

グラスに注がれる赤いシロップで染まる氷に、英国の強炭酸ソーダが注がれる。

タカヒロ「お待たせしました」

グラスの中の赤い炭酸は甘くも刺激的な味だった。グラスを置き、ナギがもう一つオーダーを出す。

ナギ「ストロベリーサンデーブランデーソースがけを」

タカヒロ「かしこまりました」

クラッシュされたドライストロベリーの混ざったゼラートに、ウエハースとブランデーソースを添える。

タカヒロ「お待たせしました」

ストロベリーサンデーを口にするナギは、ブランデーの味に少し苦笑いしていた。

ナギ（気取って頼んでみたがちよつと苦めだな……。でも悪くない）

その後もスプーンを止める事無く、ストロベリーサンデーは完食した。ナギはそろそろ帰ろうと考えたが、現実是非情だった。

ザアアアア!!ゴロゴロ!!

ナギ「よりもよって雨に雷って……」

タカヒロ「梅雨入りの嵐だね。今年と比較的早く来るとは聞いていた」

ナギ「悪いけど朝まで世話になりますがいいですか？」

タカヒロ「ナギ君なら大歓迎だよ。寝床なら、空いている部屋を好きに使ってくれて

も構わないが」

ナギ「お気遣いありがとうございます」

すると階段の奥から……

二人「ん？」

ココア「ダレカ……タスケテ……」ガクガクブルブル

ナギ「ココア？」

明らかに怯えているココアが現れた。2度目のお楽しみは次に続く。



この後どうするべきか、出来ればリゼの怒りに触れるような事や、周囲から誤解を招く様な事はしたくない。すると奥の部屋からタカヒロが現れる。

神は俺を救ってはくれなかった。

ナギ「タカヒロおじさん、それって……」

タカヒロ「少々薄着で申し訳ないが、無いよりは良いだろう。着替えを渡すから、ココア君を一晩守ってやってくれないか？少し可哀そうだから」

ナギ（死亡ルート一直線じゃないかああああああああ!!）

心の叫びと共に、一気に血が冷えていく感覚がナギを襲う。

ナギ「つまり、ココアと夜を明かせという訳ですか？」

タカヒロ「無理な考えはせず、近くにいてあげなさい」

と言う訳で、俺は空き部屋で着替えをしつつ、ココアの面倒を見ることにした。

ベッドに横になると同時に、俺の隣にはココアがいる。

ナギ（なんか複雑な気分だな……浮気してる気分になる）

目を瞑って眠ろうとするが、外は真つ暗で大粒の雨が打ち付ける。

ナギ「ココア、怖くないか？」

ココアはナギの横で答える。

ココア「凄く怖いよ……とても一人じゃられないよお……」

ナギ「そっか……しばらくの間は離れないから安心しろ。ココアを守るのも兄の役目だ」

(……ちよつとカツコつけすぎたかな。まあ嘘はついてないけど)

ココア「お兄ちゃん、ありがとう」

するとココアはナギの手を掴み、薬指を立てさせる。

ココア「恥ずかしいから、絶対振り向かないでね」

ナギ「ちよ、ココア何するつもりだよ!!」

ココアはナギの薬指を口に咥える。

ココア「はむっ、ズルッ、ジユル、ジユブジユブ……」

ナギ(いやあああああああああ)

明らかに自分の指をアレに見立てて口に咥えている。

ココア「お兄ちゃんの指……喉の奥まで刺激して……気持ちよくなっちゃう

……」

ナギ(これ明らかにアウトな奴!!どう考えてもこの小説でやれる「メタ発言」ライン超えてる!!)

※紛らわしいですがただ指を咥えるだけです。

ココア「プハッ、ハアハア、ドロオ」

ココアの口は唾液まみれで淫靡な顔と姿をしていた。

ココア「お兄ちゃんの指、太くて気持ちよかった……」

ココアはそのまま夢の中に落ちる。ナギは平常心を保つために思考を無にして目を瞑った。

その翌朝

雷は収まったが、町は梅雨に入り、傘をさす人やフードを被る子供などを多く見かける。

カランカラン

タカヒロ「やあ、リゼ君じゃないか。ナギ君を迎えに来たのかな？」

リゼ「週末の夜遊びと聞いて。兄貴は二階ですよね？」

タカヒロ「二階でぐっすり眠ってるよ」

その言葉と同時に、リゼは不気味な笑みを浮かべる。彼女のニーソックスには銀色の拳銃が輝いていた。リゼは階段を上り、ナギたちがいる部屋へと向かう。そして二人のいる部屋のドアを、勢いよく開いた。

ガチャャーン

そこには

ナギ「あ……」

薄めのYシャツ姿のナギと、パジャマがはだけて下着の見えたココアがベッドの上  
いた。

リゼ「昨日はお楽しみだったか? どうやら地獄を見たいらしいな、ココア」ゴゴゴゴ  
ゴゴゴツ

ナギ「違うんだ、これは事故であって俺もココアも悪くない!!」

ココア「お兄ちゃんは今私を守ってくれただけだから! 確かに太いのしゃぶったけど何  
も無いから!!」

リゼ「太い物……そんな破廉恥極まりない行為に及んだのか!!」

ナギ・ココア「誤解だ……!!」

リゼはニーソックスから拳銃を取り出す。その後ろでは……

チノ「ななななななッ」バタツ

ナギ「チノオー……!!」

リゼは銀色のリボルバーに、弾丸を一弾リロードする。

リゼ「一つチャンスをやろう」ガチャリツ

ナギ「あの銃は? 500!! バ○オハザード5においてBOWを一撃で葬る人類最強の  
あれじゃないか!」(わかる人にはわかるネタ)

リゼ「さあ、冥土に行こうか」

リゼは容赦なく銃の引き金を引いた。  
だが……

ココア「……」ヒクヒク

リゼ「運が良かったな、でもまあこれで良いだろう」

ナギ「不発で良かったよ……」

リゼ「とは言っても結果は同じだったけど。」

弾倉から外した弾を見て気付く。

ナギ「その弾は……」

リゼ「ただのスポンジゴミ、本物の弾は使っていない」

ナギ「良かった、でも二人とも気絶してるけど」

リゼ「そのうち目が覚めるよ。さあ、早く家帰って朝ごはん食べようぜ」

リゼはそう言つてナギに傘を渡し、ラビットハウスを後にした。

その後

チーン

タカヒロ「リゼ君の逆鱗に触れたか……」

オーダー9 妹萌えの兄がいるならその上に弟萌えの姉がいる。冗談じゃないよこれ……

梅雨入りのラビットハウス 午後の営業時間

ナギ「客一人来ないな……いつもは忙しいはずの接客すら、今日は殆ど回らないし」

リゼ「梅雨入りの影響で、外出しない人が増えてる影響かな」

リゼはマグカップに二人分のコーヒーを淹れてナギに渡す。

ココア「zzzzzzzzzzzzzzzzzzzz」

ナギ「営業時間に寝てる奴もいるし今日はもう、休み同然だな」

チノ「ナギ兄さん、言ってしまったところ数日業務が止まっているだけなので、ラビットハウスは実質休みと言う訳じゃ無いです。そもそも仕事が無くても何か理由がない限りは出勤しなきゃいけません」

ナギ「別にサボるつもりは無いけどさ、ただこうして時間だけが過ぎていくのもつまらないなって思ってた」

スマホでラインを起動すると、以前の楽と千棘の二人が楽しそうな写真を何枚も送っていた。

※ニセコイのクロスオーバーについてはオーダー5を見てください。

ナギ「楽も楽で青春謳歌してるなあ」

ココア「パチッ」「うう、今何時〜」

眠そうな顔と共にあくびするココアに、チノが時計を見せる。

チノ「お店に来てから2時間弱です。本当は営業中に寝るのは良くありませんが

……」

ナギ「大丈夫か、ココア？まあ、俺だって暇なら寝たいけどさ」

ナギはココアの目の前にカフェラテを差し出す。

ココア「ありがとう」

ナギ「後、2時間ぐらい営業が続くから頑張れ」

ココア「それなら……」

ナギ「おっと、いきなり来るなあ」

案の定ココアはナギの身体に抱き着く。

ナギ「いつまでこの状態でいるんだ？」

ココア「お兄ちゃんの匂いで充電してるから、10分くらいかな？」

ナギ「我儘な妹だな。全く……」

呆れに似た苦笑いでココアの頭を優しく撫でる。

そしてリゼは：.....

リゼ（またココアを甘やかしてる。見ているこっちの身にもなってよ：.....。ああ、私もあんな風に甘えて：.....）

チノ「リゼさん不機嫌そうですがもしかしてうらやましいんですか？」

リゼ「ああ。ちよつと妹として、見るに堪えないというか：.....」

ナギ「ごめんな、リゼ。気に障ったか？」

リゼ「今日の所は許そう。ただしその分、私を楽しませろよ」

ナギ「それじゃあ、今夜もベッドの上で過激に行こうか？」

チノ「ちよ、何の話してるんですか!!そういう卑猥な事を兄妹でやるつもりじゃ

.....」

ナギ「色々と説明するとアレに捉えかねないと思うが、別に俺は卑猥な事してねーよ」

ココア「充電完了♪これで頑張れる!!」

ナギ「なんか複雑な気分だ：.....」

妹たちに迫られるナギは心の中でいつか捕まりかねないと思っていた。読者（メタ発言）から見ればロリコンに見えるがロリコンではないし変態でもない。ただの成人前の純粹な

男子、それがナギである。（忘れてると思うので彼の名誉の為に言っておいた）

だが梅雨の中で更に彼を悩ませる、ある人物がラビットハウスに近づいてきた。

??? 「久々のラビットハウス、なっちゃん元気かな〜♡」

ナギ 「とりあえず人が来るまでどうしようか？」

チノ 「新メニューの考案を手伝ってくれま……」

カランカラン

ナギ 「あついらっしやいませ〜って……」

リゼ 「あ……」

傘を折りたたむその大人びた女性は……

??? 「なっちゃん久しぶりー会えて良かったー♡」

いきなり甘い声でナギに抱き着く。

ナギ 「のあああああ!! あ、青山姉さん!! 胸が、胸がアアア!!」

リゼ 「ああああ、青山さああん。やりすぎだああああ」

ココア 「ずる〜い、ココアもお兄ちゃん抱く〜!!」

リゼ 「お前ら、いい加減にしろおとおお!!」

チノ 「よりによって何故この人が……」

数分後

ナギ 「ハアハア、死ぬかと思った。とりあえずお帰り、青山姉さん……」

リゼは氷水をナギに渡し、ナギは一気にそれを飲み干した。

青山「もう、見ない間に良い男の子になっちゃって。良い身体つきにもなって、嬉しいわ♡」

ナギ「一体何を考えてるんだ、この人は」(もう年齢的にヤバイのに平然とハグしてくる辺り、イマイチこの関係まずいような気も……)

ナギは額に手を当て、ため息をつく。

ナギ「とりあえずナレーター、俺が休んでる間に読者にこの人の説明頼む」(メタ発言) と言う訳で説明に入ります。

青山ブルーマウンテンさん。ラビットハウスの古参の常連で小説家。ラビットハウスのお客さんだった頃のナギとはよく相席で会話をしていた仲で、年齢的にも2歳しか違わなかったため、青山さんはナギを弟のように可愛がっていた。ナギもまた、姉のように青山さんを慕っていたのだが……

これがナギの受難の始まりだった。

ナギが中学生になる頃には最早暴走しており、過剰なスキンシップや色仕掛けをするようになっていった。そればかりか周囲の人間には、ナギの姉であり、未来の妻を自称するほどに、弟愛が深くなくなっていたほか、ナギが中学卒業後にバリスタ養成校に進学した際には、借りているアパートに勝手に入って家事仕事をして同居していた。挙句、文

化祭で妻の特権と称してデートするなど、明らかにナギへのベタ付き具合が酷かった。その為ナギは青山さんを大事に思っているものの、苦手意識を持つてしまうという、矛盾した意識を抱える事になったのだ。つまりは……

ナギ「リゼと同じく度の過ぎたブラコンになったという訳だ……」

青山「何を話してるのかなー、もしかして困ってる？ウフフ、可愛い♡」

ナギ「そもそも困ってる理由8割青山姉さんだよ!!」

青山「もう、照れちゃって♡」

むぎゆうううう!!

ココア・リゼ・チノ「ヴェアアアアアアア!!」

肩の紐を緩めてナギと身体を密着させる。

ナギ「なああああああ!!」

青山「お互い身体も申し分ないし、今夜ホテルに来ない？二人で夫婦の営みを……」

ナギ「俺まだそういう類をやる年齢じゃないから!!放せええええ!!3人共手を貸し

て……」

するとココア、チノ、リゼはナギの前で制服を脱いで下着を醸す。

ナギ「え、嘘だろ……」

ココア「我慢……出来ない……」ハアハア

リゼ「もう限界だ……この状況なら何やつても問題ないだろ……」ハアハア  
チノ「私を本気にしたんだから、身体で払ってもらいますよ……ナギ兄さん……」  
ハアハア

ナギは余りの恐ろしい光景を目の当たりにして出てきた言葉はこれに尽きた。

ナギ「もうだめだあ……おしまいだあ……」

3人「覚悟は出来てるよね、容赦しないよ」

ゴゴゴゴゴゴ……

ナギ「アッ……」

夕方を告げる鐘の音と雨音と同時にナギの叫びが町の中に響いた。

オーダー10 妹の姉と話す事になったが色々間違つた認識で会話が進んでいく。どうしよう……

自室にて目覚めるナギ、昨日の一件で不調な訳でも無いのに頭痛が彼を襲っていた。だがこの後もまた、彼を悩ませる出来事が起こる事を知らぬまま……

ナギ「おはよう……」

リゼ「おはよう、兄さん。何か心なしか目が死んでるけど大丈夫？」

ナギ「大丈夫だよ、確かに色々な意味で問題だらけだけど楽しいは楽しいから」  
するとリゼはナギの背中を抱き、不安げな顔で伝えた。

リゼ「兄さんを幸せに出来るのは私だけ、ココアたちじゃなくて私を選んでよね……」

ナギは今まで意識してこなかったがリゼはナギにとっての妹。だがナギの心は違和感のある鼓動を奏でていた。

ナギ「妹の我儘を聞くのも兄だ。だけど……」

その答えはもつと後でな。」

焼けたトーストを口に咥えてシヨルダーバッグと傘を手にラビットハウスへと向かった。

その途中でパンを食べ終わると雨の中で呟いた。

ナギ「俺にとつて、リゼは妹なのか？それとも、何なんだよ……この感覚は……」  
ナギの中では兄妹以上の何かを感じていた。今考えていることは一度心にしまっておき、ラビットハウスへと足を進めた。

ナギ「まさかな」

恋なわけではない。そう自分で片付けた。

カランカラン

ナギ「おはようございます」

タカヒロ「やあ、昨日は大変だっただろうね」

ナギ「青山姉さんが帰ってきたのは嬉しいですけど何か疲れた感じしか残らないです」

タカヒロ「仕事に来てもらって悪いが今日は午前中あるお客さんが貸し切りでここを使う事になっている」

ナギ「貸し切り？何かの企業さんの取引とか？」

コーヒーメーカーからエスプレッソを淹れると氷を3つ落とした。

タカヒロ「ナギ君と話したいと言っていたよ。その人物は……」

ナギは何げない顔でエスプレッソを飲んで話を流していたが後に避けられない話だと気づく。何故なら……

タカヒロ「ココア君のお姉さんだ」

ナギ「ブフオ!!」

思いつきりエスプレッソを吹いてしまった。相手が相手だけに簡単な話じゃなかった。

ナギ「ココアのお姉さんが俺に……」

タカヒロ「後20分くらいで着くと思うよ、なあに、緊張せずに話に乗ってあげればいいじゃないか」

ナギ「ていうかココアの姉さんと話して何でこんな状況に」

頭を抱えつつ、エスプレッソを飲み干して持つてきたス〇ッチを起動してゲームに集中した。

その後……

ナギ「後2分か、どうしよういきなりすぎて何話せばいいんだ俺」

ラビットハウスの制服の襟元を整えて席を立つ。

ナギ「とにかく失礼のないようにしないとな」

そして貸し切りのラビットハウスにその人はナギの前に現れた。

???「初めまして、あなたがナギ君ですね」

ナギは余りの美貌に一度思考が停止するがすぐに切り替える。

???「あの……」

ナギ「ああ、し、失礼しました。天々座奈義つていいいます。」

???「ココアの姉の保登モカと言います。妹がお世話になっていきます」

ナギ「はい、とりあえず話をするなら一度座りませんか？」

モカ「それではゆっくり話をさせてもらいます」

席に着くとタカヒロはオーダーを取る。

タカヒロ「ご注文は？」

モカ「カフェチーノを」

ナギ「カフェオレをお願いします」

タカヒロ「かしこまりました」

タカヒロが厨房に立っている間モカがナギに尋ねる。

ナギ「ナギ君は今年から学校を卒業してここで働いてると聞いていますが、もしかし

て成人前ですか？」

ナギ「まだ19歳です。モカ姉さんの言う通りですよ」

モカ「フフフ♪モカ姉さんか、何か嬉しいです」

ナギ「どう考えても年齢差あるでしょう？」

モカ「勿論、2歳違いなので」

タカヒロ「お待ちせいたしましたカプチーノとカフェオレです」

ナギは机に置かれたカフェオレを嗜みつつ、モカは話を続けた。

モカ「ココアから聞きましたが、天々座家の養子なんですよね？」

ナギ「俺には家族も家ありませんでしたから……」

モカ「辛い事を経験していたのですね。すみませんでした、こんな事聞いて……」

ナギ「もう気にしてませんよ、それじゃあ俺から、モカ姉さんは何故俺に会いに来た

んですか？」

するとモカは嬉しそうにスマホのアルバムを見せた。

モカ「ココアが何枚も写真を送ってきて、とても嬉しそうに電話をしてるんです。」

ナギ「なんか写真の中に盗撮した形跡のある物が混ざってるんですが……」

どこで撮影したのかは聞かないでおこうと思うナギ。するとモカはようやく本題を

切り出す。

モカ「それで、ナギ君には私からお願いがあつて来たんです」

ナギ「お願いとは……」

とりあえず思考を無にして聞くことにしたがナギにとつては地雷そのものだった。

モカ「ココアをお嫁さんに貰つて欲しいんです。ナギ君に♪」

ナギ「え……」

ナギの中で何かが蒸発して言葉が出なかった。

ナギ「いやいや!!いきなりそれは、だって彼女仮にも高校生で……」

モカ「あら、だってあなた、ココアの恋人で別におかしい話じゃ……」

ナギ「恋人つてそれどこで聞いたんですか!?!」

モカ「ココアがお付き合ひしてますとメールが……」

ココア「それは兄としてココアを妹と見てのお付き合ひであつて恋人じゃあ……」

モカ「妹、ですか……ココアのお付き合ひというのはその事だったんですね」

ナギ「すみません、俺も取り乱してしまいました」

モカ「でも、一つだけ言わせてもらいます」

ナギ「はい」

モカ「ナギ君がココアのお兄ちゃんである以上、ナギ君は私の弟ですから。いつでも

お姉ちゃんに甘えてくださいいね」

ナギ（嬉しいけどまたメンドクサイ展開に……）

モカは席を立つとナギに近くに来る。

モカ「それでは最後に可愛い弟に契約を……」

「!!」

突如としてモカがナギと唇を重ねる。その後ナギは顔を赤くして手首を口に当てる。

モカ「また会いましょう、私の可愛い弟君♡」

そう言つてモカはラビットハウスを離れていった。外に出たモカが空を見上げると梅雨明けの青空が広がっていた。

モカ「ナギ君、貴方が誰を選ぶかは分からないけど……幸せな人になってください。

貴方は、私と同じ妹萌えですから」

ナギ「弟か……」

ポケットからバータイプのビスケットを取り出して齧るとナギは窓の空を見て呟いた。

ナギ「悪く……ないかな」

そして木組みの町に夏が訪れた。

オーダー11 夏が来たと思う時、それは夏服を着ている人を見ればそう感じる。

ココア「じゃじゃーん!!ココア特製ラビットハウス制服夏バージョン☆」

リゼ「おおー!!いいじゃないか。涼しいし気持ちがいい」

チノ「元のデザインを崩さずいい感じにアレンジされてます」

するとココアは大きめの制服を手に辺りをキョロキョロと見回す。

チノ「どうしました?」

ココア「今日お兄ちゃん見てないんだけど……」

リゼ「ああ、兄貴なら今食材の買い出しに出てるはずだ。もう少ししたら戻ってくるよ」

その一方でナギは……

ナギ「トマトに刻みパセリ、キュウリとトウモロコシそしてナス。後はフルーツ類だからあいつの店だな。なんか久しぶりの様な気も……」

ナギは街で軽快なジャズが流れるレンガの建物へと足を踏み入れた。沢山の輸入されたフルーツの並ぶこの街では名の知れたフルーツ店だ。主に値段的な意味で。

ナギ「値段は高いが質が良い、やっぱこの店だよな」

???「あれ？その君、その制服はラビットハウスだよね？」

フルーツの盛り合わせを並べる茶髪の男性。ナギは振り向くと彼に話かけた。

ナギ「忘れたとは言わせないぞ、輪導ステラ」

ステラ「も、もしかしてナギ!!バリスタの学校から帰って来たのか!!」

ナギ「卒業して今年からラビットハウスで世話になってるんだ。ステラこそ俺が知らないうちにフルーツ屋継いでたなんて驚きだよ」

ナギは手を差し出すとステラは感極まりながら、その手を握り締める。

ステラ「お帰り、ナギ。また会えて良かった」

ナギ「こつちも嬉しいけど、ステラは本当に変わって無いな。ぶつきらぼうのステラが懐かしいよ」

ステラ「それよりウチに来たのって仕事の事だよな？」

ナギ「ああ、そうだったな。パンケーキ用のフルーツを買いに来たんだ。何かいいのがあるか？」

ステラ「今朝は良いマンゴーとパイナップル、キウイ、イチゴが入ってね、良かったらそれをパンケーキの材料にしてはどうかな？」

ナギ「いいねえ、じゃあそれを20皿分用意できる？」

ステラ「まかせて、ナギの要望には応えて見せるから」

数分後、材料を入れたカートをラビットハウスに運んで開店の準備は完了した。

ナギ「はあ、暑いな。今の時期に長袖は少しキツイかも」

ココア「そう思ってたよ、お兄ちゃん専用の夏の制服」

ナギ「マジ、作ってくれたのか!!」

ココア「皆のよりも大きめのサイズだから作るのに3週間かかったけど何と皆の分全部仕上げたんだ♪」

ナギ「わざわざありがとう。ココア」

ナギはココアの頭を撫でるとココアは嬉しそうにしていた。

リゼ「なんだ、この敗北感は……」

ナギ「それじゃあ着替えて来るよ」

更衣室で着替えていると扉の前ではリゼがスマホを片手に待ち伏せていた。

リゼ「兄貴の写真は先に私が納めてやるんだから……」

ナギ「これがラビットハウスの夏服か、流石はココア。凄い器用だ」

更衣室へと出るとリゼが即座にカメラを構える。

カシャカシャ

ナギ「うわ!!いきなりカメラかよ」

リゼ「これは後で壁紙に使おう」

ナギ「お前どんだけ一番を独占したいんだよ」

開店時間になり、仕事が始まった。梅雨明けは人が多くなり、ラビットハウスも前の様に仕事に戻ってきた。

カランカラン

ナギ「いらつしやいませ」

地元の大学生の男「カウンター使えへんか？」

ナギ「一席空いてるので是非!!」

カウンター席ではチノがコーヒーを淹れていた。カウンター席に座る大学生は注文をする。

地元の大学生の男「レイコー頼むわ」

チノ「れ、レイコーとは……」

地元の大学生の男「ああ、すまんすまん大阪もんやからつい口がな。レイコーはアイスコーヒーの事や」

チノ「そうでしたか、少々お待ちください」

大阪から来たらしい男は、チノを見るや否やどこか含みのある笑みを受かべてガムシロップを指ではじいた。

チノ「お待たせしました。アイスコーヒーです」

大阪人の男はコーヒーにガムシロップを三つ入れつつ、ストローを回す。チノも男の視線に気づくと恐る恐る男に聞く。

チノ「さつきから私を見てるのは……何故でしょうか……」

男がチノを見つめる理由は意外なものだった。

地元の大学生の男「いや、見ていて可愛いから一度デザインしてみたいな思うて……」チノ「で、デザインとは……」

地元の大学生の男「ワイは大学でプラスチックモデルを勉強してるんや。プラモデルから美少女フィギュアまで何でも出来るんよ」

チノ「それで私を……」

地元の大学生の男「出来る限りでええんや、身体の各パーツやサイズにスリーサイズを聞けば君をモデルにして最高のフィギュアが……」

怯えるチノを助けるためにナギは動こうとしたが、意外な人物が先に動いた。

タカヒロ「お客さん、家の娘を褒めていただけなのはありがたいのですが、少し口が過ぎるのでは」

地元の大学生の男「ああ、モデラーの悪い癖が……迷惑かけたな」

ナギ「お客さん良い趣味持ってますね。今度その作品見せてくださいよ」

地元の大学生の男「勿論や、自信作持つてくるで!! ってもう12時や、リアルグレードのサザビー仕上げんと……これはレイコーの分、また来るで」

リゼ「嵐の様な客だったな」

ナギ「チノ、大丈夫か」

チノ「大丈夫です、悪い人じゃないと分かってホッとしました」

タカヒロ「チノ、皆、俺はどんなことがあつても君たちは差し出すような真似はしないから、安心してくれ」

リゼ「その声のあんたが言つても説得力ないぞ!! 遠坂○臣!!」

ナギ「ハイ出た今週のメタ発言!!」

チノ「ツツコミなのか悪ノリなのかハッキリしない発言やめてください!!」

一方で地元の大学生の男は……

地元の大学生の男「まさかランキングにこれほど差が出るとは……この屈辱は必ず返したる!! ガンプラ心形流をなめんなよ!! 見とけよユウマ〜!!」

男はそう言つてプラモ屋に入店していった。

オーダー12 軍人と警察が出会う時、空からアクシズが落ちてくる。エゴだよそれは!!

七月 客の来なくなったラビットハウス。

リゼ「梅雨明けなのに客が来ない、相変わらずこの店認知度が低いなあ」

ココア「最近執筆が手抜きな作者のおかげで十分遊べるからいいじゃん」

チノ「メタ発言に対してツツコムのも疲れました」

ナギ「結局俺たち何のためにラビットハウスに来てるのか……まあ今日も常連の方がチツプくれたおかげで何とかなってるけどな」ベリツ

ナギはそう言いつつシーフードのカップ麺のフタを剥がしてお湯を注ぐ。

リゼ「競馬のおじさんには感謝他ならないな。うちの店を気に入ってくれてるだけありがたいよ」

リゼはニーソックスからコルトパイソンを取り出してシリンダーを回転させている。

ナギ「リゼ、余り俺の前で銃を見せるなってあれほど言っただろ。俺はそういう物騒な物をもう見たくないんだよ」

リゼ「ああ、ごめん……」

コルトパイソンをニーソックスにしまい、席を立ったりゼはコーヒーメーカーに手を伸ばした。

ナギはカウンター席でカップ麺のフタを開ける。

ココア「お兄ちゃんそれまだ早いんじゃない?」

ナギ「2分が美味いんだよ、知らないの?」

チノ「最近話題の、某天気の映画でやってたアレですか……」

麺を啜るナギは麺を飲み込むと二口目を食べる前に生卵を麺の上に乗せる。ナギはシヨルダーバッグからカップ麺を3つ取り出してカウンター席に置いた。

ナギ「やってみなよ、普通にうまいから」

ナギは卵で黄色くなった麺をスープと共に飲み込む、空になったカップをゴミ箱に捨てる。ス〇ツチを取り出した。

カランカラン

4人「!!」

???「あ……休憩中でしたか?」

ナギ「い、いらっしやいませ。ごめんなさいね、今日は余りお客さんがいなくて……」

???「良かった、カウンター席いいかな?」

客が入ってきたこともあり、仕事が回り出す。入ってきた男性に水を渡す。だが

……

??? 「ちよつと君、余り関心しない物を持っているね」

男はリゼの腕を掴み、ニーソックスに入っていたコルトパイソンを引き抜く。

ナギ 「ちよつと、お客さん何を……」

男はコルトパイソンを念入りに調べるとホツとした顔でコルトパイソンをリゼに返す。

??? 「間違いなくただのモデルガンで殺傷性はない。威力も10代の子供が遊んでも問題ないけど僕のような人間に見せびらかすのは気を付けた方が良い」

ナギ 「あなたは一体……」

男はポケットから黒い手帳を取り出して名乗った。

??? 「公安警察の安室透と言う者です」

ナギ 「警察でしたか、家の妹が迷惑かけました」

透 「こつちもただの誤解で良かった。エスプレッソを頼めるかな？」

ナギ 「かしこまりました」

そして数分後に話を聞いたタカヒロが顔を出す。

タカヒロ 「お待ちせしました、エスプレッソです」

透「あなたがこのオーナーですね」

タカヒロ「公安警察の方だと聞きました。家の従業員がご迷惑をおかけしました」

ナギ「うちの店、軍人が営んでるので色々と誤解が……」

透「軍人ですか、さぞ苦勞が多いようで……」

ナギ「俺も元少年兵の身の上なんです。ロシアに従軍しました」

透の横に座るナギの言葉を聞いて察する。

透「もしかして君、ロシア独立戦争の生存者？」

ナギ「ご存じですか？」

透「寧ろ驚いたよ、10年も経った今、こんな所で出会う事になるなんて」

ナギ「あの絶望的な話を思い出せば、きつとここで生きてるなんて思わないでしょう

ね」

透「会えて良かったよ、ナギ君」

ナギ「ありがとうございます」

また一つ出会いを経験したナギ。店を後にする透を送り出した後、その後はお客さんも何人か来るようになった。ラビットハウスを後にした透は寂し気に呟いた。

透「次にここに来るのは、いつになるか……寂しく感じるな……」

透は鞆を片手に街を離れていった。

後半の仕事もようやく回るようになりさつきとは打って変わって忙しくなった。

ナギ「お会計670円になります」

???「スタンプカードって使えますか？」

ナギ「それでは提示お願いします」

ナギは提示されたスタンプカードを見ると名前を見て戦慄した。

ナギ「作者何考えてんだよ……」

???「どうしました？」

ナギ「いえ、何でもありません。お会計670から300円になります」

会計を終えてナギは呟く。

「作者あの人の事好きすぎるだろ。向こうの世界に早く戻ってほしい……」

チノ「ナギ兄さんメタ発言が聞こえてる所悪いんですがさつきの人誰ですか？」

ナギ「彼の名前はナカタリチヒ……」

チノ「ネタとは言え確実に訴えられますよ!!」

ココア「無許可のネタでラビットハウスが潰れちゃうよ!!」

リゼ「いいから仕事しろ!!作者の事なんて知るか!!」

PM5:00 仕事終了

タカヒロ「皆、仕事お疲れ様。一息つこう思って今日はマンゴーのゼラートを作っ

たよ」

ナギ「タカヒロおじさんには頭が上がらないな。ごちそうになります。」

チノ「あ、それよりも……」

3人はカツプ麺にお湯を注ぎタイマーを2分に設定した。

2分後

チノ「ちよつと堅めですが……」

ココア「本当においしいのかな？」

リゼ「当たって砕けろだ、行くぞ」

ズルズル

3人「ん!!美味しい!!」

ナギ「……」(計画通りみたいな顔)(笑)

# オーダー13 夏休み回、お約束は無いけど恋愛相談。 妹成分皆無（おい）

7月 ステラの青果店にて

ナギ「ああ、暇だ……」

ステラ「もうかれこれ3時間はいるね。休み長いんだろ」

ナギ「タカヒロおじさんに休めって言われたからな。ステラ、レモンティーもう一杯」  
ナギは現在、夏季休暇中で仕事は一切していない。こうなつた理由は数日前に遡る。

金曜日 営業後のラビツトハウス

ナギ「夏季休暇……ですか？」

タカヒロ「7月に入ってココア君たちが遊んでいるのを見て羨ましいと思わないかな？」

ナギ「とは言っても第一俺は学生じゃないし……」

タカヒロ「ナギ君は働き始めてから1回しか有給を取って無いしこのまま仕事ばかりだつたら19の青春の時間が無意味になる。君も若いんだし2ヶ月ぐらいは遊んでも罰は当たらないぞ」

ナギ「でも、タカヒロおじさん一人に店を任せるのは気が引けるなあ……」  
タカヒロ「私の事は良いから、与えられた休みで青春を謳歌するといい。ラビットハウスの仕事は俺に任せなさい」

まさかの2ヶ月に渡る大型連休を受け取ってしまったナギはただ街を歩くか、家の中でゲーム三昧。給料で購入してしまったが未開封だったド○クESも恐ろしいぐらいに進み、ス○ブラSPも全キャラ解放しても時間が有り余る、幸福なのは分からないがナギは充実した生活を送っている。

ナギ「タカヒロおじさんに感謝しないとな」

レモンティーの輪切りレモンを齧り、会計を行う。

ステラ「280円」

財布から280円を取り出し、会計を済ませると。ナギはステラに約束を取り付ける。  
る。

ナギ「ステラ、今晚時間あるか？」

ステラ「勿論、どこか行くのか？」

ナギ「今晚ラビットハウスのバータイムに付き合って欲しい。話があつてさ」

ステラ「じゃあ今晚ナギに付き合おうよ」

ナギ「よろしく頼む」

青果店を後にしてナギは街の文房具店に足を踏み入れた。

ペンの棚には女の子向けの可愛いペンが並び、その中でナギは紫のクローバー模様のペンを手に取るとそれを見つめていた。

ナギ「このペン……お揃いで買っていくか」

ナギは紫のクローバーのペンを気に入り、二本手に取るとレジへと向かった。

一本1250と高くついたがきつと喜んでくれる。そう思つてナギはわざわざプレゼント包装までしてそれを手に店を後にした。

午後3時 天々座家へ帰宅

ペンを机の下に隠してナギは夜が来るまでゲーム情報誌を読んで時間を潰していた。そんな中でゲーム情報誌の妹系恋愛ゲームの記事を見るとナギはベッドの横のマイクに声をかけてそのゲームを注文した。

ナギ「アレクシス、妹ばらだいです注文して」

アレクシス「妹ばらだいです注文しました」

ナギ「妹……デユフフフ」

※今現在忘れてるかもしれませんがナギは妹萌えで残念なイケメンお兄ちゃんです。

そして気が付けば時計の針は7時を指していた。ナギは服を着替えてアレクシスに消灯の合図を出して部屋を出る。廊下を歩いていくと天々座が葉巻を啜って庭でくつ

ろいでいた。

天々座「夜遊びか、またラビットハウスだな」

ナギ「友達と会う約束してるから」

天々座「それならこれ持っていけ、アテに丁度いいと思うぞ」

天々座はチーズの箱をナギに渡す。

ナギ「ありがとう、12時には帰るから」

天々座はナギを見送るとウイスキーの栓を開けた。

ラビットハウス　バータイム

カランカラン

ナギ「失礼するよ」

ステラ「おー来た来た」

タカヒロ「いらっしやい、今日は二人で飲むと聞いてるよ」

ナギ「タカヒロおじさん、これ父さんがアテにしてくれっさ」

タカヒロ「おお、良いチーズを持ってきたね。少し炙ったら美味しいだろう」

ナギ「調理はタカヒロおじさんに任せるよ。ストロベリーシロップソーダ頼む」

出されたシロップソーダを飲み、タカヒロおじさんはチーズを炙る中でナギは本題を

切り出す。

ナギ「今日ここに呼んだのは、意見を聞こうと思って呼んだんだ」

ステラ「それで、相談の内容は？」

ナギ「リゼとの今後についてだ。ステラも高校生で寮暮らしの妹がいるだろ？」

ステラ「俺で良ければ何かアドバイスするよ。同じ妹持ちだし」

ナギはステラに語り出した。

ナギ「実はうちのリゼ、本気で俺を異性として見てるみたいなんだ。はつきり言ってる。兄妹で愛し合うなんてギルティだけどき。でもそもそも俺は血がつながって無いし養子の兄だ。恋人になってもおかしい話じゃない。自分の中で兄妹と言う関係で完結していたけど、この頃、自分の中で何かが揺らいでるんだ……」

自分の中で何かが揺らいでる。」

ステラ「つまり、ナギはリゼを異性として見始めていると……」

ナギ「なあステラ、どうすればいい？このまま兄妹としての関係を続けるか、それとも兄妹以上の関係になるか。もし後者を選んだら二度と後戻りできない。どうすればいい？」

ステラはリングジュースにはちみつを入れるとナギに回答を出す。

ステラ「ナギ、恋した相手が血のつながらない妹でも、守る覚悟とその関係に幸せを感じるならそれが正しいと思う。ナギ自身がリゼを愛しているという自覚があるなら

恋人の関係も決して悪い物じゃないと思う。ナギは何も間違つて無いよ。妹の想いを叶えるのもまた、一つの兄としての役目だと思うよ」

タカヒロは炙りチーズをカウンタートーテーブルに出すとナギの背中を押した。

タカヒロ「世の中、間違いと思うのは人それぞれだ。答えの無い現実はいくらでもありふれている。ナギ君もリゼ君との関係を進展させたいなら後戻りできない道に悔いは無いと思うよ。ナギ君、リゼ君とどうなりたい？」

……

ナギ「リゼの彼氏に、俺はなりたい」

タカヒロ「愛してあげなさい、応援するよ」

ステラ「ナギの事、期待してるぜ」

ナギ「ありがとう、ようやく心にけじめがついた」

バータイムで相談を終えた頃、自宅のリゼの自室では……

リゼ「今日は3人で出かけて正解だったな。お陰で新しい水着も買えた」  
鏡の前で買った水着を着てリゼは髪を解く。

リゼ「来週の海水浴は兄さんと二人で……皆には負けない、イチヤイチャするのは私だけなんだから」

海を舞台に妹の座をかけた戦いが近づいていた。

オーダー14 プールだ!!水着だ!!妹だ!!サービス、サービスウ!!

ナギ「ん……………」

布団をめくり、重い腰を上げて目覚めるナギ。だが何か感じる異様に柔らかい感触、左手を見れば……………」

リゼ「あ……………んんツ……………」

ナギは即座に左手を離し、視線を逸らした。相変わず誤解を招きかねない自室でのシチュエーション。事後っぽい二人の姿は明らかに言い訳しても通らないだろう。とまあさつきりゼの胸を思いつきり掴んでいたが……………」

ナギ「状況的に『夜明けのコーヒー』とか『ゆうべはお楽しみでしたね』とかそういうので通るならまだマシだけどそれ以外は兄としての立場が……………」

リゼ「兄さん何も悪くないよ……………」

ナギ「だと良いんだけど……………って起きてるのかよ!!」

リゼ「兄さんおはよう、とまあ胸揉まれてた時点で目が覚めてたけど」

ナギ「はい、終わったー、人生終わったー」(棒)

リゼ「兄さん、好きなようにしていいって言ったのは私なんだから兄さんに責任は無  
いんだよ。あんまりマイナスに考えないで」

ナギ「色々やったらアウトな事もあるんだから間違ってもリゼの処女は奪わないぞ。  
いいから服着てくれ」

リゼ「ああ、伝えてなかったけど……」

ナギ「何だ？」

リゼ「今日うちのプールにココアたちが遊びに来るんだ」

ナギ「え?!」

1時間後

メンバー 一同「こんにちはー!!」

ナギ「いらつしやい、つてかモカ姉さんや青山姉さんまで来たのかよ」

ココア「あれ?お兄ちゃん、お姉ちゃんを知ってるの?」

モカ「私の弟なので♡」

ココア「ちよつとお!!お兄ちゃんいつから弟に!!」

チノ「どういう事が説明してもらいますッ!!」

シャロ ヒソヒソ「お兄ちゃんつて案外年上キラーな所あるよね」

千夜 ヒソヒソ「兄様には年上の身体よりも私たちの身体の方が魅力的な事を教えて

あげないと♡」

青山「あら、プールサイドの女の決戦ってカンジ。負けられないわね」

ナギ「まあとりあえず、お茶入れるから中に入ってくれ」

一同「お邪魔します」ガラガラ

リゼ「ストローチップ、何だその無駄にデカイ荷物はッ!!」

ナギ「あんたら帰る気全然ないのかよ……」

ココア「一日お世話になりました。これでいいでしょ」

ナギ「まあ、泊まるならそれでもいいけどさ、部屋なら空気がいくらでもあるし、好きに使ってくれ。」

リゼ「ただし、興味本位で親父の仕事部屋には立ち入らないように」

リビング

ココア「じゃじゃーん、チノちゃんを買った水鉄砲!!」

千夜「リゼちゃんたちとウォーターブリッツするために皆で買ったんですよ」

ナギ「それなら俺はこいつで……」

引き出しからナギが取り出したのは水鉄砲だった。

リゼ「ス○ラマニューバじゃないか」

チノ「流石はニ○テ○ドーガチ勢!!ス○ラトウーンの水鉄砲まで所有していたとは

!!

ナギ「今でも人気過ぎてア○ゾンや楽○で高額取引されている夏アイテムだ」

チノ「リゼさんはどんな水鉄砲を？」

リゼ「これで勝負だ!!」

ナギ「ト○プソン・コ○テ○ダーの水鉄砲モデルか。魔術回路をぐちゃぐちゃに出来る弾もあつたら良かったな」

チノ「言つとききますけど、それネタ抜きでエグイですし笑えませんか」

モカ・青山「それじゃあ私たちはお昼ご飯を作つて待つてますから妹たちをお願いします」

ナギ「スゲー息ピツタリ」

天々座家所有のプール

ナギ「と言う訳でくじ引きでチーム分けしたが……」

よりによってなんでお前らだよ!!」

千夜「兄様、安心してください。兄様が撃てなくても私が纏めて冥土に送りますから♡」  
「ゴーカイガン型水鉄砲を構えて

ナギ「その笑顔で物騒な発言しないでくれる!!」

シャロ「予告する。あなたのお宝（妹ポジション）頂くわ」  
VSチェンジャー水鉄砲

回しながら

ナギ「発言からして嫌な物が見え隠れしてるし思いつきりル○ンレンジャーパロつて  
る」

ココア「お兄ちゃん♪殺つてもいいよね♪」

チノ「裏切り者は容赦しません」ジャキン!!

リゼ「覚悟は出来てるか、私は出来てる。ジユルルル」(※タピオカミルクティー)

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

ナギ(なんだよ、この殺伐とした空気)(汗)

リゼ「このメダルが地面に落ちたらゲーム開始だ。行くぞ」

ピキーン

カーン

ズザザザザ

強烈なスピードでサイドを走りながら水鉄砲を乱射する。

ココア「チノちゃん、補充お願い」

チノ「カートリッジは補充します」

ココア「とにかく、お兄ちゃんをあの二人から引きはがさない」と

千夜「させない!!」

シャロ「甘い!!」

ココア「えっ!!」

バシャー!!

ココア「そんな……」

腕につけた(100均の)ゲージバンドの色が消えていく。

シャロ「私のスタンドは暗殺向きよ」

チノ「ココアさん!!」

チノは回復用のお湯風船を投げるとリストバンドの色が元に戻る。

ココア「ありがとう」

千夜「ここは抑えるから、シャロちゃんは兄様の護衛に」

シャロ「任せて、恐らく今お兄ちゃんは……」

プールサイド左

リゼ「本当に良かったのか?後で何か言われるかもしれないぞ」

ナギ「リゼに銃向けるぐらいならこういう風に撫でる方が良いよ」

リゼ「ホント、兄貴は私に甘いんだから」

ナギ「二人きりの時は、いつものように兄さんって呼んでほしいな」

リゼ「それじゃあ、兄さん。今日の私の水着、可愛いかな?頑張って選んだんだけど」

ナギ「凄く可愛いよ。でもリゼの身体は見慣れた感じがするな」

リゼ「それなら……」

リゼはナギを押し倒して自らの身体をナギに押し付ける。

リゼ「私の身体じゃなきやダメにしてあげてもいいんだよ。ふふっ♡」

ナギ「それはもつと大人になってからな」

リゼ「兄さんにはまだ無理か……」

シャロ「リゼ先輩? 何お兄ちゃんを勝手に頂いてるんですか、話が全く分からないだけども」

ナギ「ア、ア、アワワワワワワ」

明らかに目のハイライトが消滅して水鉄砲を構えるシャロがいた。

リゼ「いくら後輩でも、家の兄貴に手を出すなら容赦はしないけど」ガチャツ

燃え盛る二人の影とお互いを向ける銃口にナギはヤバいと感じ、間に突入した。

ナギ「もうやめろよ!! 後でいくらでも相手してやるからこんなドロドロの勝負は中止だ!!」

その言葉にシャロは正気に戻ったのか銃を下ろした。

シャロ「さっきの話、本当だよね?」

ナギ「勿論、言ったからには守る。妹の願いは裏切らない」

リゼ「それよりも交戦してる3人を止めないと」  
そう言ってナギたちはプールサイドに戻った。

だが………

ココア「もう……私の顔ベトベトだよ……それにお兄ちゃんの液体濃くて苦くて……でも……病みつきになっちゃう♡」

千夜「ふふつ、兄様は気持ちよくなりましたか……私も……兄様の液体で胸の間が凄くぬるぬるです……」

チノ「……」（泡吹いて気絶）

リゼ「お前らなにやってんだー……」

シャロ「わお♪お兄ちゃん、二人を思いつきり粘液まみれにするとは……超興奮♡」  
ナギ「遊びでもタチが悪いわ!!それとその液体は何だ!!」

ココア「クー○ツシュのバナラだよ」

ナギ「食べ物そんな卑猥な遊びに使うな!!とにかくお前らはシャワー浴びてこい!!  
ウォーターブリッツはこれで中止だ!!」

プールサイドでの戦いが終結した後

ナギ「史上最大に疲れた……」

モカ「お疲れ様、ナギ君」

青山「ナギ君、この後のお風呂は私と……」

ナギ「入らないしも水着も着たくない……」

モカ「お兄ちゃんも大変ね、でもそれもちゃんと妹を大事にしてる大きな意味よ」

ナギ「後、連載2話なのに俺はどうなるんだ？」

次回に続く(笑)

## オーダー15 花火の空……伝える想い……

ナギ「花火大会？」

「ラビットハウスで昼食をとっていたメンバー。ココアが見せたポスターに視線が行く。」

ココア「夏の大イベントの花火大会を皆で見ようよ!!」  
目を輝かせるココア。モカもナギを誘う。

モカ「楽しそうですね、ナギ君もどうかしら？」

ナギ「楽しそうですね、俺も見ますよ」

リゼ「場所は当然ラビットハウスだよな」

ナギ「昔はいつもラビットハウスから見てたもんな」

チノ「それなら浴衣を用意しましょう」

ナギ「リゼはどうする？」

リゼ「私の浴衣が見たいのか？」

ナギ「俺は見たいと思う」

リゼ「兄貴が見たいと思うなら着る」

ナギ「楽しみにしてるよ」

ココア「千夜ちゃんやシャロちゃんも誘おうよ」

モカ「きつと楽しいと思うわ♡」

タカヒロ「花火大会か、その時期なら俺も忘れちゃ困るな」

ナギ「タカヒロおじさん、もしかして……」

タカヒロ「花火を見るならごちそうは当然、俺が料理を担当する。任せなさい」

ナギ「タカヒロおじさん、期待してます」

ナギ「開催日は？」

ココア「明後日だよ」

ナギ「決まりだな!!」

リゼ（今夜なら……私の想い、聞いてくれるかも……）

リゼは淡い期待を抱いていた。

チノ「それよりもあの人どうしますか？」

青山「……」

バーボンのロックを手になくなくなってる青山さんがいた。

ナギ「青山さん……ごゆっくり」

ナギは青山さんの横に酔い止めと花火大会のメモを置いてラビットハウスを後にし

た。

翌日 リゼの自室

リゼ「着てみたけど……慣れないなあ……」

鏡の前で悩むリゼ、納得のいかない自分の姿に不安を募らせる。

リゼ「印象を変えたら、兄さんもきつと……」

そしてリゼは髪をを解く。

リゼ「これで、女の子らしく見えるかな？」

その一方でナギは書店にいた。今週の電○萌王を購入しに来たのだが新刊コーナーで一冊の雑誌に手を伸ばす。

ナギ「花火大会の女の子のシチュエーションか……」

リア充専門雑誌を立ち読みしていた。そしてナギはふと思う。

ナギ「あの時の答え、今なら伝えられるかもしれない……」

ナギもまた、リゼの想いと向き合おうとしていた。

兄妹が想いを重ねようと動く中、その時はすぐに訪れた。

花火大会当日 P M 6 : 0 0 ラビットハウス

千夜・シャロ「こんばんはー」

ココア「ようこそ、花火大会へ!!」

千夜「兄様はまだですか？」

ココア「今向かつてる、もうすぐ着くよ」

青山「ウオツカ追加お願い」

天々座の家

ナギ「お待たせ、行こうか」

リゼ「待たせないでよね、兄さん」

ナギ「……」

ナギはリゼの浴衣姿に息を呑んだ。

ナギ「可愛い……な」

リゼ「早く行こうよ、みんな待ってるよ」

ナギはリゼの手を掴んでラビットハウスへと向かった。

PM7:00

ナギ「夏休み!!バンザイ!!」

ラビットハウスに集まったナギたちはジュースを手に花火開始まで料理に舌づつみを打っていた。ホットサンドにミートボールスパゲティと大皿のスクランブルエッグ。チーズサラダもあれば揚げたてのフライドポテトとターキーと至れり尽くせりだった。ナギはフライドポテトを食べながら自分の中で覚悟を決める。

ナギ（伝えるんだ、俺の想い……）

モカ「ナギ君、どうかされましたか？」

ナギ「多分……：兄妹でいられるのは、これで最後だと思っただ……：関係的に俺はもう、兄さんじゃないと思う」

モカはその言葉の意味を察してナギの頭を撫でる。

モカ「ナギ君、応援するわ」

ナギ「ありがとうございます」

ココア「そろそろ花火打ち上げまで5分だよ、外に集合……！！」

千夜「兄様、一緒にどうですか？」

シャロ「もちろん、お兄ちゃんとは私と一緒に見るよね♪」

ココア「ずるい、お兄ちゃんと見るのは私だよ」

リゼ「ど、ドロボウ猫!!今夜は私が兄貴と一緒に見る予定だぞ」

チノ「どうしてこの四人はナギ兄さんの隣を狙うんでしょうか……」

4人「どつちにするか、選んでください!!」

ナギは少し頭を悩ませるが事情も事情なのではつきりと答えた。

ナギ「リゼ、一緒に見よう!!」

リゼは目を輝かせてナギに駆け寄る。

ナギ「俺はリゼとバルコニーから見よ。皆、ごめん」

シヤロ「負けちゃったか……」

千夜「でも兄様を選んだからには何も言いませんよ」

ココア「お兄ちゃん、楽しんでね♪」

チノ「皆さん、外に出ますよ!!」

そしてバルコニーへと向かったナギとリゼ。ナギは時計を見てカウントする。

ナギ「5秒前、4、3、2、1」

カウントと同時に、花火が上がり、空は輝き始めた。

赤や青、紫に黄金色に染め上げる瞬間に兄妹二人は嬉しそうに見上げる。

ナギ「綺麗だな、リゼと見ることが出来て良かった」

リゼ「私も、今年の花火を兄さんと見れてよかった」

ナギ（今なら……きつと話せる、あの時の答え）

すると突然、リゼはナギの手をギュッと握る。

ナギ「何か言いたそうだな、どうした？」

リゼ「ねえ、兄さんは今の私がどう見えてるの？」

ナギは考えは同じだったことを知ってリゼに尋ねる。

ナギ「今の俺は、リゼの兄だ」

花火が大きく打ち上がると同時にナギはリゼの肩を自分に寄せる。

ナギ「自分は今まで逃げていた。リゼがもし……俺と今以上の関係になったら、もう兄妹に戻る事が出来なくなる。血は違っていて、俺は受け入れる事が出来なかった。でも、ようやく自分で受け入れる事が出来た。だからリゼに聞きたい。兄妹の関係を捨てて……」

俺の恋人になつてくれないか？」

リゼ「もちろんだよ、私を、兄さんの恋人にして」

その言葉を聞いたナギはリゼの身体を抱きしめた。

ナギ「よろしく、リゼ」

リゼ「よろしく、ナギ君」

花火を眺めながら二人は唇を重ねる。ナギは身体が熱くなっていた。

リゼ「大好きだよ……」

そして二人を祝福する様にハートの花火が打ち上がった。

チノ「ナギ兄さん、リゼさん、お幸せに」

その様子を見たチノは音を立てずに二人を見届けて去っていった。

青山「テキーラもう一杯〜」

タカヒロ「青山先生、そろそろやめた方が良いと思いますが……」

青山「大丈夫zzzzzz」

タカヒロ「今日は飲みすぎたね、青山先生」

そしてナギは出会う事になる。かつて共に戦った、戦友の息子と。

## オーダー　　END　　彼は心に輝きを宿している。

8月　夏休みラスト10日の昼時

ココア「アーーーーもうダメだーーーー!!宿題終わらないよーーーー!!」

チノ「いいから続けてください!!読書感想文だったの30文字から何も進んでませんよ!!」

千夜「とりあえず新作の抹茶団子持ってきたから一息つこうよ」

シャロ「集中力の上がるハーブアロマ持ってきたからこれで回復して」

チノ「そういうのはココアさんにとって逆効果です!!」

ココア「ウウウウウウ」(涙目)

ラビットハウスで宿題に追われるココア。3人がかりで教えているが間に合うかはまだ分からない。いつもの喧騒が響くラビットハウスだったが、肝心な所あの兄妹はとうとうと……

リゼ「兄さん♪そんなに私の胸がすきななの？」

ナギ「触った中じやありぜが一番だよ」モミモミ

リゼ「まだ……本番はダメだよね？」

ナギ「もう少し大人になったらな。今やったら警察案件だから」

リゼ「触るなら下着の上からじゃ満足しないでしょ」

ナギ「いつもそうじゃないか、これ以上ハードル上げたらこの作品通報されかねないぞ」

リゼ「そのメタ発言、ツツコミ役のチノがないのが少し残念だ」

ナギ「チノがいなかったらこの作品も非常識まみれだったと思うぞ」(元から非常識な所ばかりな作品だったけど。これも作者の趣味と言うか……)

ナギのスマホ「ピロロロロ……アイガツタビリーブ「ハウジヨウエムウ!!」

ナギ「タカヒロおじさんからだ」

リゼ「何故その着信音Σ(？ロ？ー)ガーン」

ナギ「はい、ナギです」

タカヒロ「突然で申し訳ない、ラビットハウスに君を尋ねてきた人がいる。ラビットハウスで待つてるから来てほしい」

ナギ「わかりました、すぐに行きます」

ナギはスマホと財布を手にするとリゼに引き留められる。

ナギ「リゼ？」

ナギ「私を一人にするなら、キスぐらいしてよ」

ナギはリゼを抱きしめてベッドに倒れると、デイープキスをする。

リゼ「兄さん：：：んんッ」

濡れる唇に触れる。

ナギ「行つて来るよ、夕飯期待してるから」

リゼ「行つてらっしゃい、兄さん」

リゼはナギを見送るとリゼのスカートから少し液体が足を伝つて流れた。

リゼ「やだ：：：キスされただけで、感じちやうなんて：：：」

ラビットハウスに着いたナギは扉を開ける。

ナギ「お待たせしました、お呼びとの事ですが：：：」

カウンター席にはギターケースを背中に背負つた自分より年上の男性だった。

???「待つてたよ、修業時代以来かな？天々座さん」

ナギ「し、心咲先輩!!」

タカヒロ「そう、君に大事な用があるそうだ。修業時代にバイト先で顔を合わせてたんじゃないのか？」

ナギにとつての友人の一人、心咲護。ロックバンド、ソニッカーズのギタリスト兼ボーカル、ラブライブの世界で王と呼ばれる程の逸材である。

心咲「少し、話に乗ってくれないか？君にとつても大きな意味になると思う」

ナギは心咲の隣に座り、机の氷水をグラスに注ぐ。

ナギ「それで、心咲先輩は俺に何を？」

心咲は少し不穏な表情で語り出す。

心咲「これから話すのは君にとって辛い事かもしれない。それでも聞いてほしい、君の本当の家族の事」

ナギ「!!」

この時、ナギの脳裏に浮かんだのは……

炎で焼かれる故郷と……

血と屍だけの残酷な光景だった。

ナギの目は光を失いつつあったが何とか持ちこたえ、心咲に聞く。

ナギ「教えてくれ、俺の家族は誰なんだ……」

心咲「カウントゲートの街で、セラ・アシムと言う一人の少年がいた。家族は代々小麦に頼らないパン作りの家系で、セラはいつしか舌の感覚だけでパンの違いを判別できていた」

ナギ「えっ……」

ナギ（普段食べるパンと全然違いますね？）

心咲「幸せな家庭で育ったセラは、戦争が無かったらパン作りをしていたかもしれない

い。でもセラは10歳の頃にカウントゲートが独立を宣言。カウントゲート市長は独立軍を設立した。その戦争に従軍したほとんどの人はカウントゲートのただの一般市民だった」

ナギ「じゃあ、皆……無理矢理戦争に……」

心咲「結果としては痛み分けて終わった戦争だけど、家族が死んで生き残ったのはセラと言う少年だった。唯一の生存者と言われるまでになった……」

ナギ「じゃあ、セラ・アシムはやっぱり……」

心咲「君の本当の名前だよ、天々座さん」

ナギはようやくよく思い出した、自分の本当の名前を、それに対して心咲はある内容を記した古い革手帳を渡す。ナギはそれを開くとそこには。パンの材料や作り方が記されていた。ページの最後まで来ると……

メモの最後のページ（これを読んできている人が私の息子であるのなら伝えよう。生き残った君に罪はない。僕たち家族がいなくなってもどうか生きるのを諦めず、この手帳のパンを大切な誰かに作ってあげなさい。君が生きる意味をくれた神様の為にも新しい人生を思うがままにしなさい。セラ・アシムの毎日が幸せと共にある事を願う）

心咲「天々座さん？」

ナギの瞳には大粒の涙が溢れていた。

ナギ「俺、生きててよかった……ありがとう、父さん……母さん……」  
泣くナギの肩を叩き、心咲はナギに伝える。

心咲「君を守って先立った両親の為に、これからも幸せに生きて。天々座さん」

ナギ「はいっ!!」

落ち着きを取り戻したナギはタカヒロにお願いをする。

ナギ「タカヒロおじさん、厨房を借りていいですか？」

タカヒロ「好きにするとい、君の想いの形をパンで表して見なさい」

ナギはエプロンを身に着けると手帳を手にパン作りを開始した。

PM7:00

リゼ「初めてやってみたけど、良い感じ♪」

テーブルにはご飯と豆腐の味噌汁、キュウリの漬物にサケのバター焼きとナギが好み

そうなものが並んでいた。

リゼ「それにしても、兄さん何してるんだらう？そろそろ帰ってきてもいいはずなん

だけ……」

ガチャツバタンツ!!

玄関を開ける音にリゼは反応して出迎える。

リゼ「兄さん、お帰り!!」

即座にナギを抱きしめる。

ナギ「ただいま、リゼ!!」

リゼは手に持った紙袋から漂う甘い匂いに気づく。

リゼ「兄さん、この紙袋は何?」

ナギ「俺の家族の大事な宝物だよ」

リビングの食卓に座るとナギは目を輝かせる。

ナギ「今日は和食なんて珍しいな」

リゼ「私なりの気持ち、たくさん食べてね♪」

ナギは箸を手にとると白米や味噌汁を口にして喜んだ。

ナギ「やっぱこれだよな!!家庭の味っていうのは」

夕食後

リゼ「兄さん、そろそろあの紙袋開けていい?」

ナギ「それじゃあ、お楽しみといこうか?」

ナギは紙袋を開けるとそこに入っていたのは……

リゼ「メロン……パン?」

ナギ「俺の両親が残してくれたレシピで作った、俺の思い出のパン」

リゼ「兄さんの……両親が……」

ナギ「リゼ、このメロンパンを食べる上で一つ確認したい事がある」

ナギはリゼに対して真剣な目で問いかける。

ナギ「俺の本当の名前は、セラ・アシムって言うパン屋の家系だった。でも両親が亡くなってから、その家系は途絶えてしまった。俺が言いたいのは、アシム家の再興の為に、リゼから答えを聞きたい。リゼは……」

俺と結婚したいか？」

リゼは唐突にナギから出た言葉にリゼは顔を真っ赤に染めてナギの身体に触れる。

リゼ「本当に、そのつもりなの？」

ナギ「ああ」

リゼ「ありがとう、兄さんがそう言ってくれるなら私は……」

兄さんのお嫁さんになる」

ナギはリゼの身体を抱き寄せてナギは伝える。

ナギ「良かった、リゼが俺を受け入れてくれて」

二人は身体で気持ちを確かめ合うと皿の上のメロンパンを二人で手に取ってスマホのカメラを見つめる。

ナギ「シャツターきるよ」

リゼ「ピース!!」

カシャツ!!

これは喫茶店で働く二人の兄妹の、

愛の物語……

二人の未来は……まだ誰にもわからない……

END

## スペシャルオーダー クリスマスのトキメキ

クリスマス前日のラビットハウス。気が付けば町はイルミネーションやサンタ姿の人たちが大きく宣伝をしている。そんな中でナギたちもパーティーを開く事が決まり、メンバーは舞い上がっていた。一方でナギは……

ナギ「俺達が付き合い始めてそろそろ一年が終わるな、リゼ」

乱れたシャツのナギ。ガーターベルトの下着のリゼがナギの身体に重なっている。

リゼ「兄さんはいつになったらゴムやめてくれるの？」

ナギ「大学に入ってもう少し大人になったらな」

リゼ「付き合ってるし結婚も約束したんだから思いつきり生でもいいのに」

ナギ「ちゃんと二十歳になったらいくらでもやってやるから、今は我慢しろ」

リゼ「わかった、兄さん」

ナギ「ああ、それとさ」

リゼ「何？」

ナギ「明日、ココアとケーキの準備に参加するんだ」

リゼ「ココアと……」

ナギ「ごめん、気に障ったか？」

リゼ「行つてきなよ、ココアは私にとって友達だし兄さんの妹だから」

ナギ「そつか……」

翌日 ラビットハウスの厨房にて

カシヤカシヤ「クリーム作りはこれでよし」

ココア「いちごカットこれでよし、お兄ちゃん、昨日焼いたスポンジケーキ持ってきて」

ナギ「カットはどうする」

リゼ「私に任せてくれないか」

ココア「リゼちゃん、ありがとう」

タカヒロ「ナギ君、こつちの方手伝つてくれないかな？今丁度サーモンの切り身が届いたところなんだ。サーモン料理はナギ君に任せたいんだけど出来るかな？」

ナギ「任せてください、良い料理を知ってます」

タカヒロ「それじゃあ、俺はローストチキンを作るから」

ナギはサーモンの切り身を見ると目を輝かせる。

ナギ「これならあれが作れるな、よし!!」

ココア「出来たケーキは6番の冷蔵庫に、こつちはロールキャベツ作るよ」

リゼ「それなら私はポテトサラダを作る」

ナギ「ココア、5番のキッチンが空いてるから使って」

ココア「お兄ちゃん、ひき肉どこだっけ？」

ナギ「2番の冷蔵庫だ、すぐに使えるように準備しておいた」

厨房があわただしい中、チノはと言うと……

街のぬいぐるみ屋さん。

店員「ありがとうございます」

チノ「……」

チノの手には小さいポ○モンのヒ○ニーのぬいぐるみが握られていた。

チノ「ナギ兄さん、喜んでくれるかな……」

甘兎庵

千夜「抹茶のロールケーキ。兄様喜んでくれるかな？」

フルール・ド・ラパン

シャロ「皆の為に用意したハーフティー、クリスマスのオリジナルグラス付き。きつ

と気に入ってくれるはず♪」

それぞれが特別な想いで用意したプレゼントを手に、ラビットハウスへと足を運んだ。

PM6:00 ラビットハウスにメンバー集合  
全員「メリークリスマス!!」

掛け声と同時にお互いが作った料理を自慢する。

ナギ「リゼのポテトサラダはやっぱりうまいな!!」

ナギ「ナギさんのサーモンチーズバゲットもうまい」

ココア「お兄ちゃん、ロールキャベツ食べてみて」

ナギ「それじゃあ、頂こうか」

シャロ「タカヒロさんのローストチキンもおいしいよ」

千夜「ココアちゃんのオムレツも中々」

ナギ「ココア、良かったな」

チノ「あの、食事中申し訳ないのですが……」

ナギの服を掴み、チノは紙袋を渡す。

ナギ「最近好きなキャラクターだと聞いたので、これ、プレゼントです」

ナギ「これは……」

ナギが紙袋を開けるとヒ○ニーのぬいぐるみが出てくる。ナギはその瞬間嬉しさがあふれ出した。

ナギ「チノが俺にこれ買ってきてくれるとは、凄く嬉しいよ」

チノ「ナギ兄さんへの、私からの気持ちです。いつも助けてもらってるので」  
リゼ「……」何か黒いオーラ

シヤロ「チノちゃんへのジェラシー駄々洩れだよ!!」

そしてリゼはほとぼしる嫉妬と共にローストチキンにかぶりついてた。

ココア「ジャジャーーン!!ココア&お兄ちゃん特製シヨートケーキだよ!!」

千夜「甘兎庵特製抹茶ロールケーキ、天羽々斬です」

ナギ「サラつとパクったな」

チノ「早く切り分けましょう」

リゼ「私に任せろ」

ケーキを切り分けて皆で食べ始める。

ナギ「自分で作っただけ自画自賛出来るな、うまい」

リゼ「千夜のロールケーキもうまいな」

千夜「甘兎庵で今週だけ販売してる限定メニューですよ♪」

チノ「作る時に私も協力しました。主に抹茶スポンジケーキの製作で」

リゼ「しれつと敵側サイドの発言してるぞ……」

ナギ「まあ、おかげで良いクリスマスを楽しんだからいいんじゃないか」

シヤロ「クリスマスにいがみ合うのはよくないよ♪そろそろ遅いしお開きにしよう

か」

メンバーが食器を片付けてラビットハウスを後にする。すると今まで無言を貫いていたココアがナギに身体を寄せる。

ココア「お兄ちゃん、後でちよつといいかな？」

ナギはココアの身体に触れると何かを感じた。

ナギ（この感触は……）

リゼ「兄貴、何やってるんだ？」

ナギ「ああ、わ、悪い」

手を離すとナギはハーブティーを注いで飲む。ナギはリゼのスマホにメッセージを送る。

ナギ「少しココアに付き合う事にした。マジでごめんけどココアの事は責めないでくれ」

リゼはため息をつきつつリゼはメッセージを返す。

リゼ「ココアの事は責めたりしないし兄さんも責めないよ。ココアの事は好きにすればいいよ」

ナギはリゼに許可を貰うとココアに聞く。

ナギ「それで、ココアは急にどうしたんだ？」

ココア「部屋に来て、見せたい物があるんだ」

二階に向かう二人を見つつ、リゼはカウンターで残ったレモンスカッシュをシャンパングラスに注いだ。

ココアの部屋

ナギ「それで、見せたい物って」

ココア「良いって言うまで目を閉じて」

ナギは目を閉じて手で覆い隠すとココアは服を脱ぐ。

ココア「もういいよ」

ナギが目を開くと視界に入るココアの姿は……

ナギ「ゼルダ……姫……」

ココアは神々のトライフォースのゼルダ姫の姿をしていた。

ココア「お兄ちゃんへのクリスマスプレゼント。どうかな？」

ナギ「すごく可愛いよ、本物みたいだ」

ココアは嬉しそうにナギに近づくと身体を密着させる。

ココア「ねえ、一ついいかな」

ナギ「何が欲しいのかな？ハイラルの姫君様」

ココア「キスして……欲しいな……」

二人はベッドに倒れるとナギとココアが唇を重ねる。

ココア「お兄ちゃん、大好きだよ……」

ナギ「ありがとう、ココア……」

クリスマスに心を通わせたナギとココア。二人は身体に触れ合いながらクリスマスを愉悦に浸った。

そして翌日 天々座家

ナギ「昨日の事、流星に不味かったかな……」

ベッドから出たナギはリビングへと向かう。

ナギ「リゼ、おはよう」

リゼはベーコンエッグを焼き終わるとナギに飛びつく。

ナギ「リゼ、こんな朝からどうした？」

リゼ「昨日はココアとお楽しみだったでしょ。今度は私の番だから……」

リゼはエプロンを外すとその下はランジェリーだった。

リゼ「覚悟していてね、兄さん♡」

ナギ「ああ、お手柔らかに頼むよ」

ナギは苦笑いしながらリゼの身体に触れた。

ナギ（俺、とんでもない日常を過すごしてゐるな。今更だけど……）

## スイーツオーダー バレンタイン・エクスタシー

PM1:00

ナギ「どの店もバレンタインムードだな……」ベリッ!!

街を歩きながらイチゴ味のロリポップのビニールを剥がして口に啜える。

ナギ（まあ、たばこ代わりなんだけどね……はは……）

ナギは成人を迎えて一ヶ月。気取っては見るものの変な所で自重してしまうが

……

ナギ「まあ、成人迎える前に妹と数え切れないピーしたりピーを奪った俺が言えた事じゃないけど」

※どういう意味かはお想像にお任せします。

そう言いつつナギはラパンへと入店していった。

ラビットハウスの方では……

リゼ「兄貴にはチョコレートブラウニー、昔から喜んでくれたからなあ」

ココア「チョコココロネ、お兄ちゃんが美味しいって言ってくれたんだよ」

チノ「ナギさんにはお手製ではありませんが私は最後までチョコたつぷりのTOP

PUを

渡します」

リゼ「それじゃあ、材料も揃ったし、早速取り掛かるか」

ココア（ああ、想像しただけで……身体が熱くなっちゃう♡）

チノ（な、何か良からぬ風が……）

一方でナギは

シャロ「お兄ちゃん、ハッピーバレンタイン!!」

シャロはナギに赤いリボンの緑色の箱を渡す。

ナギ「ありがとう、シャロ」

シャロ「お兄ちゃんの為に作ったチョコレートクッキー。お兄ちゃんだけの特別だよ」

ナギ「全く、可愛い愛すべき妹だ」

店内でいちやつく二人の周りはチョコの貰えない男どもの嫉妬で溢れていた。

2件目 甘兔庵

千夜「いらつしやいませ、兄様♡」

ナギ「ほうじ茶と最中を……」

千夜「えっ、チョコレート受け取りに来たんじゃないんですか」

ナギ「もらえるの!!」

千夜「兄様の為に用意してありますよ」

ナギ「ありがたいな」

千夜「こちらが兄様の為に作った……」

チョコ団子の「鬼滅の刃」です」

ナギ（お菓子に使う名前じゃないよ!!）

千夜「ぜひ、受け取ってください。これからもよろしくお願いしますよ」

ナギ「こっちもよろしく」

店を後にしたナギは二つのチョコを抱えてラビットハウスへと向かった。

PM5:00

ナギ「二つ貰えるなんて、俺がお兄ちゃんて良かったなあ」

そう言ってナギはラビットハウスの扉を開ける。

ナギ「こんにちはー」

タカヒロ「やあ、ナギ君」

青山「なつちゃんいらっしやーい」

モカ「ナギ君、久しぶりですね」

ナギ「モカ姉さん、珍しいですね。パーティムにいるなんて」

モカ「ナギ君を待ってたんですよ、チョココレートを渡す為に」

ナギ「モカ姉さんまで……、感無量です」

青山「可愛い弟君にお姉ちゃんがチョココレートを渡すのは義務ですから♡」

青山さんとモカさんはチョココレートを取り出し、ナギはそれを受け取る。

ナギ「本当にありがとうございます!!」

そして厨房では

リゼ「これで完成!!」

ココア「結局夜になっちゃったけどね」

チノ「ナギ兄さんはちゃんと待っていてくれました、早速渡しましょう」

3人「ハッピーバレンタイン!!」

ナギ「皆、ありがとう。良い妹を持って良かった」ダー（涙）

タカヒロ「良かったじゃないか、今年は7つ貰えて」

ナギ「ホワイトデー、頑張らないとな」

するとココアはナギに一つのお願いをする。

ナギ「お兄ちゃん、ココアの部屋に来てくれるかな。見せたい物があるんだけど」

リゼ「!!」（この感覚は……）

ナギはとりあえずリゼにフォローを入れる。

ナギ「少しだけ我慢してくれ、後でちゃんと責任取るから」

リゼはとりあえず聞き入れてしばらくバータイムの席で待つことにした。

ナギ「さて、俺は何をすればいいのかな？」

ココア「クリスマスになにしたか覚えてる？」

ナギ「ああ、それは……」※ご想像にお任せします。

戸惑うナギの前でココアは服を脱ぐと……

ナギ「ピンクのランジェリー、また攻めた姿だな」

ココア「お兄ちゃん、好きなだけいいよ」

ナギ「どうなっても知らないぞ」

※この後非常にヤバイ展開が始まります

ココア「あ……アアツそんなに、揉んじや……」

ナギ「ココア、凄く良いよ……」

ココア「こんなの、気持ち良すぎて……とろけちゃう……♡」

ナギ「そんなにここを触ると気持ちいのかな？」

ココア「そんなに責めないで……おかしくなっちゃう……」

ナギ「ジュルウウ!!」

ココア「ああ、おにい、ちゃん……耳はたべないでエ……」

ナギ「そろそろ、イクか……」

ココア「イかせて、一緒に……」

ナギ「これで、どうだ!!」

ココア「あ、アーーーーー♡♡♡」

ココア「はあ……はあ……」

ナギ「ココア、大丈夫か……」

ココア「こんなに……気持ちいなんて……」

ナギ「今後はどうする？」

ココア「もつといっぱい……お兄ちゃんとやりたい……」

ナギ「妹のワガママに答えるのも兄の仕事だからな。今後もよろしく」

チノ「ナギ兄さんとココアさんがあんな事を……」

ベッドの上で悶えるチノ。

チノ「あんな過激で破廉恥な事、いけないのに……何でこんなに……」

チノは胸に手を当てると顔を赤く染める。

チノ「こんなに熱くて……ドキドキするんですか……」

大人の世界を知ってしまったチノちゃんだった……

## パースデーオーダー 最高のプレゼント

夜の静けさと街の明かりが輝く中、ナギは少し気取った白いシャツの上から青いジャケットを羽織る。

ナギ「こんなに嬉しい事は無いからちよつと気取つてみたけど悪くないな」

今日はリゼの誕生日、兄として、恋人として一日リゼとデートをする。

ナギは財布とスマホ、そしてプレゼントの入った黒い紙袋を手にして部屋を出た。

リゼ「待つてたよ、兄さん」

青のニーソが眩しくナギの視界に入る。

リゼ「兄さんつてニーソックス好きだよ。イケナイ事するときはいつも要望してるし」

ナギ「ニーソックスほど、目を奪われるものは無いよ」

リゼ「行こ♪好きなだけ付き合つてくれるんでしょ♡」

ナギ「今夜のデート、ゾクゾクするねえ」

リゼ「仮○ライダーダ○ルのファイリ○プ君じゃん」

ナギ「その言葉待ってた」

軽い話をしつつ、二人は外へと向かった。

ナギ「今日はリゼが行きたい所、買いたい物、何でも買ってやるぜ」

リゼ「じゃあ……」

リゼが指をさしたのは先は……

リゼ「このスマホカバーの店、高くて買えない物が多いからためらってたんだ」

ナギ「確かに、オタク向けのタイプから革製の者まで凄いラインナップだな（一つで6000円のブランドモデルもある。高校生には高嶺の花だな）

するとリゼが2セットタイプのスマホカバーを持ってきた。

リゼ「兄さん、これが欲しいんだけど、買ってくれる？」

リゼの持ってきたスマホカバーには白地でピンク色のラメのハートが描かれていた。

それもスマホをくつつければハートの形が完成する。カップル御用達アイテムだった。

ナギは嬉しそうに支払いを済ませるとスマホにカバーをはめる。

ナギ「これいいな、リゼの愛が感じられる」

リゼ「兄さんとお揃い、凄く嬉しい」

二人はスマホを並べて笑顔を見せた。

二人は街で予約していたイタリア料理の店の座席でノンアルコールドリンクをグラスに注ぐ。

ナギ「リゼ、お誕生日おめでとう」

リゼ「ありがとう、兄さん」

グラスを交えると二人はイタリア料理を愉しむ。初めての高級フレンチだったが優越感と今日の特別さを味覚で感じる。ナギはその最中で黒い紙袋をチラチラと目にする。

ナギ（これを渡すのは食事の後の方がいいな）

リゼ「何か夢みたい、兄さんとかいう店に来てるの」

食事を終えて中央の広場を散策する中、ナギは意を決してリゼに黒い紙袋を渡す。

ナギ「俺から、本命のパーズデープレゼント」

リゼ「おぉー、待ってました!!」

リゼは目を輝かせて黒い紙袋を開けた。中に入っていたのは……

リゼ「これは……」

アメジストの輝くバングルだった。

ナギ「リゼがよくアクセサリーの本を読んでいるの見て、いつも物欲しそうに見ていた。リゼの気持ちにこたえてたくて頑張って貯金して買ったんだ」

するとリゼは嬉しさをこらえ切れず、ナギの身体をギュッと抱きしめる。

リゼ「ありがとう、兄さん!!」

ナギはリゼの頭を撫でて伝える。

ナギ「リゼ、俺はお前の兄で良かったって思ってる。生まれて来てくれ、ありがとう」

リゼ「兄さん、私の事、好きなだけ愛してくれるよね」

ナギ「勿論」

リゼ「それじゃあ、私と身体を重ねて……」

ナギ「いくらでも愛するよ」

二人は宿を取って、心あるがままに激しく抱き合った。

眠りについてしまった二人はそのまま朝に帰宅する。

ナギ（朝帰りになるとはな……まあ今回は父さんも許してくれるだろう）

ナギは自室に入るとベッドの上での夜の事を考えながら眠りについた。

その一方でリゼはバングルの写真をナギの置かれたベッドの横に飾る。

リゼ「兄さんが私を愛してくれる、それだけでドキドキする」

顔を赤く染めてナギの写真を見つめるリゼの太腿を水が伝っていく。

イケナイ関係にまんざらでもない二人だった。

## ロマンソオーダー ホワイトデーのお願い

ホワイトデーで活気づくホテル。ナギたちラビットハウスのメンバーはスイーツビュッフェを楽しんでいた。

ココア「このいちごミルクプリン美味しー♡」

リゼ「クリームチーズビスケットも中々」

チノ「メロンパン凄く美味しいです」

ナギ「いやーまさか米四津さんのホワイトデーライブに来た上に参加者にビュッフェをご馳走してくれるとは」

米四津玄師郎とは……

オーダー6にゲスト出演した人気歌手。今では若者を中心に音楽ジャンルのランキングを塗り替え続けるネット社会の生み出した傑物である。デビュー前はボカロを中心に活動していた。

そして今ライブが終わり、ナギたちはビュッフェを嗜みつつ米四津さんのトークを待っていた。そして……

アナウンス「会場の皆さん、これより米四津氏によるホワイトデーのお言葉が始まり

ます」

会場は一気に歓声に変わる。そしてステージの前に現れたその人こそ……

米四津「皆さんどうも、米四津玄師郎です」

ナギ「米四津さん、やっぱカッコいいなあ」

米四津「先ほどのライブを楽しんでくれたでしょうか？ 今回のホワイトデーライブは十分、皆へのプレゼントになってくれたでしょうか？ 僕なりのプレゼントとしてきつと、喜んでくれたと思うと、やってよかったと思っています。ここに居る幸せなカッパルに最高のおもてなしが出来た事を僕は自画自賛しています。このホワイトデーの奇跡が永遠の思い出になってくれる事を僕は願っています。皆、本当にありがとう!! ハッピーホワイトデー!!」

ワアアアアア!!

大きく彼を祝福し、ステージから消えていく彼を見届けた。

ホテルの部屋に戻ったナギたちは四人部屋の中でカバンからス〇ッチを取り出してあるゲームを遊び始めた。

ナギ「あつまれど〇ぶつの森、昨日発売したばかりであんまりやり込めてなかったな。これを機にいつしよに進めようか？」

3人「勿論!!」

お互いス〇ツチを手に、無人島のあれこれを話しながらゲームを進めていく。失敗やクラフトを大きくしていきながら4人の時間は過ぎていった。

お風呂場：……

ザアアア

ナギはシャワーを浴びると湯に浸かり、疲れを癒す。

すると……

ココア「お兄ちゃん♪一緒に入ろう」

ナギ「おおい!!何やってんだよ。タオルどうした??」

ココア「タオルなんてつけてたら、見えないでしょ。見てよ、私の身体」

ナギは頭を抱えて結果的に逃げられないためココアのワガママに付き合うことになった。

ココア「ああ……ふやうん!!」

ナギ「気持ちいいか?」

ココア「気持ちいいよ、お兄ちゃんに敏感なところ……吸われて……」

ナギ「ココアは胸を攻めらるの本当に好きだよな」

ココア「もう一度、イカセテ……気持ちよくしてえ♡」



口づけでのキス。ナギは精神回路が暴走し、赤くなる。

モカ「頑張ってね、私の弟君」

ナギは二度目のキスをされた。ナギは唇に触れて気まずい顔をするがモカさんに気に入られてる事を大きく再確認した。

ナギ「ブラコンもシスコンも好きならキスも愛の一つ……か」

ブラコンとシスコンも境界線はキスの一つ、だった。

## 【3期放送記念】 ナギ君のご挨拶。

とある春休みの事

フルール・ド・ラパン

シャロ「お待たせしました、ハーブミックスティーです」

ナギ「ありがとう、良い香りだ」

ハーブティーを注ぎ、嗜むナギの隣にシャロが座る。

シャロ「それで、話というのは……」

ナギ「単純にちよつと出かける前に声を掛けたかっただけ」

シャロ「お出かけですか？」

ナギはハーブティーを飲み終わると語り始める。

ナギ「ココアが明日から実家に帰るんだ、その時にモカ姉さんから誘われてご挨拶で

一晩泊まる事になったんだ」

シャロ「成程、嫁のご両親にご挨拶ですね。グヘヘ」

ナギ「そういう受け取り方してほしくなかったなあ」

シャロの悪い笑顔を少し苦笑いするナギにシャロは耳元で囁く。

シャロ「場合によつては姉妹まとめて食べちゃう事も出来るんですよ？モカさんの極上の身体をさぞかしオイシイでしょうね♡」

ナギ「モカさんの……身体を……」

ナギの脳裏に浮かぶ……モカさんの姿は……

ナギ「いやいやいやいや、それはダメだろ!!」

シャロ「えっちい想像してから否定するのはムツツリですよ。お兄ちゃん♡」

その夜の事

ナギ「荷物はこれでよし」

荷物を準備した後、ベッドに飛び込もうとするその時、

コンコン!!ガチャツ

リゼ「兄さん、入っていい?」

ナギ「リゼか、どうした?」

リゼはスカートをめくり、真ん中に指を当てる。

リゼ「二日間いないんでしょう?私を一人にするなら抱いてほしい。だってもうこんなに濡れてるんだから」

スカートの下にはつきりとよくわかる染み、ナギはベッドの引き出しから10枚つづ

りのゴムを取りだす。

ナギ「3回ぐらいでいいか？」

リゼ「いいよ、早く入れて？」

ナギはリゼを抱きながら、リゼが腰を振り、甘い声を出しながら快樂に浸った。

翌日

ナギ「昨日はちよつとやりすぎたな……」

ナギは滋養強壮ドリンクを飲みながらココアとバスを待つ。

するとバス停に元気なあの声が聞こえてきた。

ココア「おっはよー、お兄ちゃん☆」

ナギ「ああ、おはよう。時間丁度いいな」

ココア「だって今日はお兄ちゃんとお姉ちゃんと一緒に泊れるんだもん。待つてる方

が無理だよ」

ナギ「まあ、久々に家族と会えるんだからそりゃあ嬉しいよな」

ブロロロロロ……

ナギの目の前を大きな赤いバスが走り、バス停に停車する。二人はバスに乗ると扉を開けて桜を眺めながら揺れる。

ココア「お兄ちゃん、たまごサンド作って来たけど食べる？コーヒーもあるよ」

ナギ「用意が良いな、頂こう」

バスで揺れる事30分、目的のバス停に停車した二人は荷物を下ろしてバスを降りる。ココアの案内で山を歩いて行くとその場所に到着した。

ナギ「ここが実家か、ベーカーリー保登。マイナスイオンの綺麗な場所にあるんだな」

ココア「早く、入ろう!!」

ココアが扉を開けるとそこでは丁度焼きたてのメロンパンを並べる一人の女性がいた。

ココア「お母さん、ただいまー」

ココアの母「おかえり、元氣そうで良かった。それにそこにいるのがナギ君？」

ナギ「初めまして、天々座奈義です」

ココアの母はナギを顔をニコニコとしながら見つめる。

ココアの母「案外可愛い顔してるのね？」

ナギ「あ、いや、その……」

すると後ろから

モカ「ちよつと、私の弟君で勝手に遊ばないで、ぷすー」

ナギ「モカ姉さん、お久しぶりです。一晩だけですがよろしくお願いします」

モカ「ええ、こちらこそ、楽しい時間を過ごしましょう♡」

するとココアの母は紅茶とさっきのメロンパンを持ってくる。

ココアの母「丁度焼きたて出した所だから、お茶会でもしましょ♡」

ナギ「それじゃあ、頂こうかな？」

モカ「私も、今晚美味しく食べさせてもらうわね」

ナギ「今晚？」

モカは唇に人差し指を当て、ナギにウインクする。

ナギはメロンパンを食べながら少し考えた。

ナギ「まさか……」

ココアの母「ナギ君はココアちゃんと一緒に部屋で良いかしら？」

ナギ「ココアと寝るんですか、俺？」

ココアの母「お兄ちゃんなら、妹の隣に居ても不思議じゃないでしょ？」

ナギ「じゃあ、そうさせていただきます」

その後は美味しい食事を頂きながらラビットハウスでの日常の話やトランプゲームに興じたり、楽しい時間を過ごした。

そんな中、ナギはお風呂に浸かりながらリゼに電話をする。

リゼ『そつちでは楽しそうにしてるみたいだね』

ナギ「そういうリゼはどうしてる？」

リゼ『一人じゃ楽しくないからこっちもシャロと千夜と3人でお泊り会だよ』

ナギ「そつか、まあ、楽しくやってるなら安心した」

リゼ『帰ったら2日分私を満たしてよね?』

ナギ「分かった」

お風呂に上がり、黒いシャツへと着替えたナギはリビングに入るとモカさんがレモンティーを作っていた。

モカ「一緒にどうですか?」

ナギ「それじゃあ、寝る前に一杯」

レモンティーを嗜みながらモカさんはナギに聞く。

モカ「ねえ、ナギ君はココアの事どう思いますか?」

ナギ「妹として、可愛いと思いますよ。いつもココアに振り回されてるけど個人的には楽しいです」

モカさんは嬉しそうな顔をする。

モカ「ココアをそう思ってくれるなら、姉として嬉しい限りです」

話を終えてナギはココアの部屋に行くと沢山のぬいぐるみに囲まれた部屋でココアより先に眠りについた。

その夜の事

ココア「お兄ちゃん!!」

ナギ「ん……」

眠い目を擦り、起き上がるナギの視界にココアが写る。

ナギ「どうした？」

ココア「わかつてるよね？」

ナギはココアの問いかけを理解するがナギの口元が硬くなる。

ナギ「ここでするのかよ、ヤバいんじゃないか？」

ココア「出来る限り声抑えるから、やって」

ナギはココアの服のボタンを外し、服を脱がすとその後ろから扉が開く。

モカ「あら？お楽しみ、始まっちゃった？」

ココア「お、お姉ちゃん!!」

ナギ「あ、も、モカ姉さん!!これは……」

(まずい!!こんな場所見られた以上タダで済むはずがない!!下手したらサツのご厄介になりかねない!!)

だが帰って来た反応は真逆だった。

モカ「ナギ君、ココアも良いかもしれないけど、大人のお姉さんの身体は興味ないか

しら?」

ナギ「え、まさか……」

モカ「弟君がお姉ちゃんに甘えて良い様に、お姉ちゃんが弟を甘やかすのは当然」  
モカさんは胸元を開けて服をはだけさせ、ナギを見つめる。

モカ「ナギ君にどんなことされちゃうのか？楽しんでわ♡」

ココア「お姉ちゃんと私、同時にイかせてよね」

ナギは目の前の下着姿の姉妹に迫られ、リゼに懺悔した。

ナギ「ごめん、リゼ……どうやら俺はここまでみたいだ……」

ココア・モカ「さあ、私たちを気持ちよくしてね♡」

この後何が起きたか覚えていない。朝目覚めた時にはランジエリー姿の姉妹がナギのサイドで挟むように眠っていた。

ナギは翌日、お土産のパンを沢山抱えて街に帰って来た。その後はリゼとの夜を過ごす結果的にナギはモカさんに手を出したことに罪悪感を感じていた。

あのお泊りから5日のある日、モカさんから手紙が届いた。

ナギ君へ

元気にしていますか？あのお泊り会の夜での出来事は少しやりすぎてしまいましたね。私はナギ君と一夜を過ごせたこと、すごく嬉しかったんです。ココアも私もあなたを愛しています。でも、ナギ君が選んだリゼちゃんやんの事は生涯私たち以上に大切な存在だと言う事を忘れないでください。お兄ちゃんとして、恋人としてのナギ君とリゼちゃんやんの幸せを祈っています。

ありがとう、私の可愛い弟君

モカより

手紙を読み終えたナギは部屋を出てリゼに声を掛ける。

リゼ「どうしたの、兄さん」

ナギ「ちよつと、デートに行かないか？」

自分にとって大切な物、それはリゼである。